

ISSN 1343-103X

Inohana Tokyo



Vol. 25

JANUARY.1. 2022

東京ゐのはな会

千葉大学医学部ゐのはな同窓会 東京支部

令和3年11月吉日

東京るのはな会会員皆様

東京るのはな会会長 岡本 和久
会計 石井 康宏
会計 吉田 健一

令和4年度年会費納入のお願い

皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症対策に追われる日々とお察し申し上げます。東京のはな会も、総会、新年会が新型コロナウイルス感染症のため相次いで中止となり、同窓会として通常の活動ができない日々が続いております。東京都で1日5000人以上の陽性患者を認めた第5波は想像を絶する勢いでした。今後も第6波、第7波への備えが必要と予想されます。治療薬、予防薬が確立していない現在、しばらく新型コロナウイルス一掃は困難と思われれます。その中では、これまでのように延期・中止ではなく、感染に十分に配慮しながら、できることを継続、再開していく動きも必要です。

この度、例年通り、情報誌の発行に至ることができました。お手に取って同窓生、同窓会の情報とともに、楽しいひと時をお過ごしください。

今後、現役医学部生との交流、若手会員のプレゼンテーション、著名な講師を招いての講演など、魅力ある新年会・総会を開催します。新型コロナウイルスの完全撲滅が見込めない状況において、一般に講演会もしくはウェブ、ハイブリッド形式が当たり前になるかもしれません。いかなる形式であってもお気軽に参加していただければ幸いです。

その他、卒業生の漏れのない名簿作成を企画してまいります。

私たちは同窓の皆様の交流や親睦そして情報交換を活発にすることにより、千葉大学医学部卒業生の誇りを重んじ発展を願うため活動しております。会員の皆様が気軽に参加できるひと時を過ごせる同窓会をはじめ、診療に役立つ情報交換の場を提供することに努めてまいります。そのためには皆様の年会費が全ての活動の礎であり、切に年会費納入をお願いいたします。また、まだ会員になられていない同窓や新卒業生をご存じでしたら、加入のお勧めをお願いいたします。

○年会費は5,000円です。

○今回から、より利便性の高いコンビニ振り込みに変更させていただきます。締め切り日までにお振込みをお願いします。

○昨年の納入をお忘れの方には2年分の用紙を同封します。

○口座振替登録されている会員はそのまま継続とさせていただきます。

表紙、裏表紙・井上 賢治（平成5年卒）

【場所 夢の大橋】

2020年より延期となっておりました、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。開催を記念して、夢の大橋に設置された聖火台の昼と夜を撮影いたしました。

目 次

Inohana Tokyo vol.25

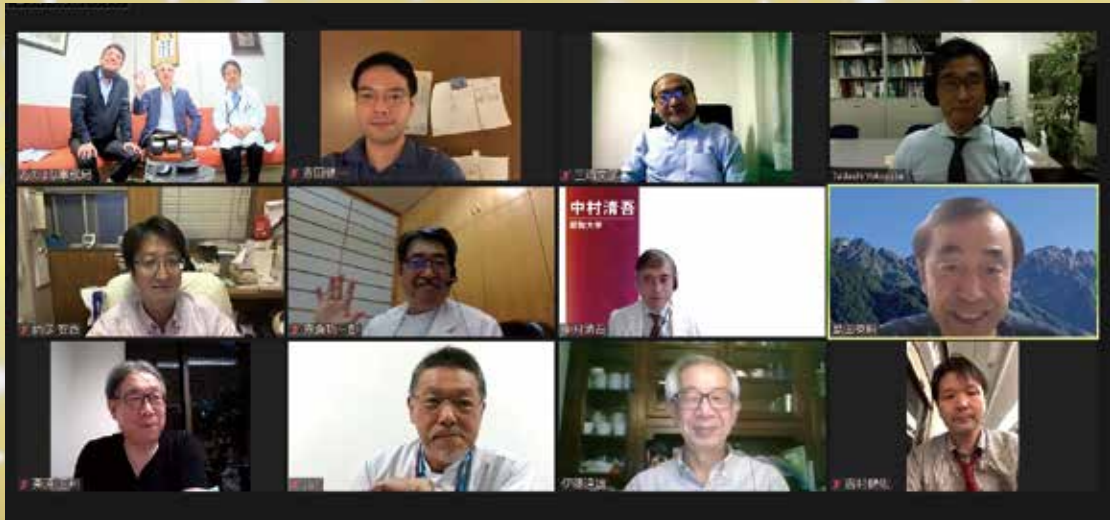
Page

巻頭言	新会長の挨拶	岡本 和久	4
	副会長就任のご挨拶	赤倉功一郎	6
	東京いのはな会副会長を拜命して	齊藤 光江	7
	東京ろのはな会副会長3年目の挨拶	井上 賢治	8
	東京ろのはな会新体制にエール	吉原 俊雄	9
	新理事就任の挨拶	小風 暁	10
	新理事よりご挨拶	沖永 聡子	11
	ご挨拶	甲賀かをり	12
	新理事よりご挨拶	柳沢 如樹	13
	新理事よりご挨拶	武藤 剛	14
	新理事就任の挨拶	田 啓樹	16
	人との出会いに繋がるプラットホームを目指して	千先 園子	17
	新たに教授等に就かれた先生方より		
	日本医療安全調査機構(医療事故調査・支援センター)の役割	矢島 鉄也	19
	JCHO 理事に就任しました	山本 修一	24
	帝京大学医学部附属溝口病院病院教授就任のご挨拶	三浦 文彦	26
	産科麻酔の普及を目指して	加藤 里絵	29
	卒後、節目の年を迎えて		31
	卒後60年を振り返って	岩倉 弘毅	32
	卒後50年を迎えて	菊池 友允	33
	卒後40年を迎えて	松島 常	34
	卒後30年目を迎えて	緒方 直史	35
	卒後30年のことば 今までを振り返って「Aiって知っていますか?」	山本 正二	36
	卒後20年を振り返り	鎌谷洋一郎	38
	卒後20年を迎えて	坂田 阿希	39
	卒後20年のことば	椎名 由美	40
	卒後20年を迎えて	田中 純子	41
	卒後10年のことば	川合 祐美	42
	卒後10年目を迎えて	舟越葉那子	43

厚労省だより	
医系技官として勤務を始めて	井上 雅寛 44
厚生労働省における医系技官と人事交流	勝山 陽太 48
昭和大学のコロナ対策とるのはな同窓生の動静	中村 清吾 51
史実から読みとるパンデミック	横須賀 忠 53
コロナについて 近況報告 55
編集後記 59
収支報告書 60
東京ののはな会会則 79

東京るのはな会 Web 理事会

2021年5月6日 開催



2021年10月7日 開催



巻頭言

新会長の挨拶



東京ゐのはな会会長
千葉大学客員教授

岡本 和久
(平成2年卒)

新年明けましておめでとうございます。一昨年（令和2年）から始まった新型コロナウイルスとの闘い（共存）もあつという間に2年になりました。

コロナの問題もいずれは共存しながら終わっていくと思います。このコロナの問題で、世の中の、また私たちの業界の、様々な溜まっている滓があぶりだされました。

アフターコロナの時代になって、私たち医療人が医療をリードできるのか、グローバル資本主義に飲み込まれていくのか、正念場だと思います。

僕の世代も含めて、国民皆保険というのは当たり前になっていますが、もう一度、国民皆保険が昭和33年（1958年）に出来た時の事を思い返して、この制度を守っていかなければならないのではないかと考えています。

昨年6月に会長を拜命してから半年以上が過ぎました。様々な改革を成し遂げられ、全国ゐのはな会の会長に就任された吉原俊雄前会長の後任として、東京ゐのはな会のさらなる充実と発展に尽力する所存です。

東京は、ゐのはなにとって特別な場所だと思っています。千葉大学医学部入学者の中で、東京出身者がおおよそ2/3を占めています。また卒業した後、東京の病院で働いているゐのはなの仲間も非常に多いです。若い人たちにも、東京の病院で苦勞した先輩の話や、ゐのはな会があったからこそ助かった話、いろいろな話が出来ればと思っています。そんな話を交えながら、若い世代が気軽に来て、いろいろな相談や悩みをおつける事ができる萬（よろず）相談所のような、東京ゐのはな会にしたいと考えています。

僕が卒業後、開業して東京ゐのはな会に関わった頃は、中山恒明先生の第二外科およびその関連の先生たちが東京にたくさんいらっしゃいました。研究でも臨床でもさすがに千葉大学と僕自身も感じていました。徐々に年月を経て、新設の大学もたくさん卒業生を出し、千葉大のプレゼンスも以前よりは目立たなくなっています。

ゐのはなの仲間たちを見ていて感じるのは、東京でも千葉でも一人ひとりには素晴らしい仕事をしていますが、その仕事が自分たちでも分かっていなかったり、外部で正しく評価されなかったりしています。非常に残念です。もっともっと、自分たちの仕事を押し出せるような、そういうゐのはな会にしていきたいと思っています。

新役員についても、今まで東京ゐのはな会を支えていただいた方たちに加えて、昭和大学の医学部長になられた小風暁君（平成2年）、小児科の甲賀かをりさん（平成8年）、若手の柳沢如樹君（平成15年）、武藤剛君（平成19年）、田啓樹君（平成19年）、千先園子さん（平成21年）も加わっていただきました。現役生も含め若手が気軽に参加して、先輩から多くを学べる、そのような東京ゐのはな会にしていまいます。

また、吉原前会長が全国ゐのはな会会長に就任された強みをいかして、全国ゐのはな会とも強力に連携してまいります。

副会長就任のご挨拶



独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）
東京新宿メディカルセンター 副院長・泌尿器科部長

赤倉 功一郎
(昭和 59 年卒)

このたび東京るのはな会の副会長にご推挙いただきました。身に余る光栄であり、心より有難く思っております。会のさらなる発展のために、岡本和久会長を助けて力を尽くしてまいり所存ですので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は 1984 年（昭和 59 年）に千葉大学を卒業し、ただちに千葉大学泌尿器科学教室に入局しました。その後、関連病院、カナダ留学、千葉大学病院を経て、2002 年より現在の病院に勤務しております。前立腺癌ならびに尿路結石症の臨床と研究を主なテーマとしてきました。最近、東京都共通の前立腺がん地域連携パス作成に携わり、病院勤務医と地域かかりつけ医の先生方の連携構築を目指してまいりました。院内では、医療安全および医療情報を担当しています。

私どもの病院は、飯田橋駅より徒歩約 5 分の場所にあります。かつては、厚生年金事業団により東京厚生年金病院として運営されてきました。2014 年に独法化され、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）の東京新宿メディカルセンターとなり現在に至っています。急性期病棟のみならず、回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟も有する 520 床のケアミックス型病院です。千葉大学同窓生は、病院幹部から初期研修医まで 10 名以上が在籍しており、コロナ禍以前には千葉大学同窓の会を毎年開いて懇親をはかってきました。現在も、たくさんの千葉大学医学部の学生が当院での初期研修を希望して見学に来てくれています。

コロナ禍およびその後において、求められる医療は大きく変容するものと推測されます。これまで以上に、医療施設間や診療科間の連携ならびに多職種の協調を推進して、患者ニーズにきめ細かくこたえていくことが重要と思われまふ。一般病院勤務医の立場から、東京るのはな会の先生方との連携強化や情報共有に少しでも貢献できるように努力してまいります。ご支援のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

東京いのはな会副会長 を拝命して



順天堂大学医学部乳腺腫瘍学講座 主任教授 齊藤光江
(旧姓 海老原)
(昭和59年卒)

千葉大2外に憧れ、しかしながら入局説明会で女子への門戸が開放されていないことを認識させられ、東大分院外科に入局して37年が経ちました。以来、母校に一度も足を運んだことが無い恩知らずの私が、千葉大学同窓会の理事を拝命したり、東京いのはな会の副会長を拝命するなど、分不相応ではありましようが、元気に歳を重ねることができているということ、女性の割には、アカデミアで生き残っていることなどが、先輩方のお目に留まったということではないかと思ひ、このご縁を有難いことと感謝申し上げますとともに、自分なりの貢献ができましたらと思っております。

臓器別ではなかった研修医時代から、臓器別に診療担当を割り当てるようになった助手時代にかけて、専門性を極めることと、広くオールマイティーな外科医になることと、どちらがよいのかは当時の関心事でした。米国MD アンダーソンがんセンター細胞生物学に留学中に息子を出産することになったのですが、産後に自身の胸を患ったこと（幸い良性でしたが）と、帰国後乳腺担当の先輩医師が急逝したことで、自身の進路が期せずして決まり、癌研究会附属病院（大塚）の門を叩き、約7年後に東大本院に呼び戻されるまで充実した乳がん診療の修練を積みました。その約3年後に順天堂大学に国内大学初の乳腺センター設立のため、お声をかけていただき、15年が過ぎたところです。この間、60名以上の医局員の育成に関わり、昨年からは日本外科学会初の女性理事を拝命し、一昨年からは日本医学会連合理事として、これまで経験したことのない、日本の医学会を俯瞰できる仕事に従事させていただいております。東日本大震災の頃には、教室運営に悩み、中央大学の社会人大学院に入学し、土日と平日夜間を使って、MBAの取得を果たしましたが、何の役に立つのかと思われつつも、組織運営には多少の役に立っているのを感じます。今後、齊藤がこの伝統ある千葉大の同窓会のお役に立てるとすれば、自身のように母校から離れてしまっている同窓生の立場に立ち、以上のような経歴を活かし、母校や同窓会に求めるものを考えていくということかと思っております。何分不慣れ、かつ本業に没頭するあまり、課外活動には多くの時間が割けない身ではありますが、諸先輩方はじめ、会員の皆様にはご指導賜りますよう、お願い申し上げます。

東京ゐのはな会副会長 3年目の挨拶



医療法人社団済安堂 井上眼科病院 理事長 **井上 賢治**
(平成5年卒)

2018年に東京ゐのはな会 副会長を仰せつかり、早3年が経過しました。広報委員としてこの会報誌「Inohana Tokyo」の編集も担当しています。思えば10年ほど前に岩倉先生からご縁をいただき、初めて会合に参加してみると周りは大先輩ばかりで、平成5年卒業の私が一番年下でした。最初は緊張しましたが、普段なかなか話す機会のない先輩方と同じ大学の卒業生というつながりから、温かい雰囲気でご貴重なお話しをお聞きすることができました。若い世代には新しい交流の場として、ゐのはな会を是非活用してほしいと思っています。

この会報誌も、若い先生方の顔が見えるような企画をつくり、幅広い世代の方楽しんでいただくことを念頭に制作しています。私が編集を担当した当初「年男・年女」という企画を行っておりましたが、年齢が明るみになってしまうことを躊躇される方が多く、打ち切りとなってしまいました。現在では「卒後節目の年を迎えて」と題し、医学部を卒業してから10年ごとの節目に当たられる先生にご寄稿いただいております。若い世代には10年後、20年後のキャリアの参考になればと考えています。各世代で活躍する先生方をご紹介することで、診療科や世代を超えた関係構築の架け橋になれば幸いです。その他、厚労省の医系技官の方にもご寄稿いただいております。また違った立場でご活躍する先生方の知見から学びを得る機会になると思いますので、是非ご一読ください。

こういった企画をとおして、同窓でご活躍する先生方が総会に参加するきっかけになり、母校を誇りに思っていることを実感すると、私自身もその1人として大変嬉しく思います。ここ最近は総会の開催も難しくなり、直接顔を合わせたコミュニケーションが希薄化してしまったのは非常に残念ですが、webツールを使用した活発な情報交換ができるようになったポジティブな面をアフターコロナでも活かしていきたいと考えています。

最後に私事で大変恐縮ではございますが、井上眼科病院は2021年で140周年という節目の年を迎えました。本来であれば大変ありがたいことですが、コロナ禍で状況が一変し、医療現場は苦しい時期が続いております。このような時にこそ、ゐのはな会のような同窓のコミュニティが医療連携やさまざまなつながりとなることで、この困難を乗り越える一助となることを願っております。

東京るのはな会新体制にエール



千葉大学るのはな同窓会会長 吉原 俊雄
(昭和 53 年卒)

2021 年度より岡本和久新会長により東京るのはな会がスタートしました。新役員とともにコロナ禍にも負けず、斬新なアイデアや人的交流を活性化して東京支部同窓の結束を高めていくものと思います。Inohana Tokyo が東京支部の会員に届く頃には以前と同じレベルでなくとも、講演会や懇親の場が自由に開催できることを願っています。この 1 年余りは各先生方の病院、診療所は様々な対応を迫られたことと思いますが、私の勤務していた病院は軽症～中等症の陽性患者さんが 14～15 人入院していました。当初よりも増悪する患者さんが増え、より高度の大学病院に紹介したり、転院先に苦慮したりと状況は徐々に悪化しています。耳鼻科は小児科とともに受診者激減しましたが、2020 年より少しずつもどってはいます。唯、手袋や手術キャップ、フェイスシールド使用などセミ full PPE での診療を余儀なくされています。個人的な出来事として 4 月からは都内のある大学の医療保健学部で言語聴覚学専攻の教員となり、病院勤務は週 2 回としていますが、勤務の大学の多くの学部ではオンライン授業となり、クラブ活動も停滞し大学生生活は一変しており気の毒な状態です。一方、6 月に私は千葉大学のはな同窓会会長を拝命しましたが、同窓会の中核をなす東京るのはな会とは密に連絡をとり、各支部と連携を図りながら同窓会組織を活発なものにしていく所存です。会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

新理事就任の挨拶



昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座教授 **小 風 暁**
(平成2年卒)

同期の岡本和久会長よりお話をいただき、この度理事を仰せつかりました平成2年卒の小風暁と申します。現在は昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座に所属し、学生教育と研究に従事しております。

卒業後、平成2年5月より国保松戸市立病院（現松戸市立総合医療センター）で翌年3月まで内科研修を行った後、平成3年4月に東京大学大学院医学系研究科第三基礎医学寄生虫学専攻に進学し、東京大学医科学研究所寄生虫研究部にて千葉大学医学部の先輩であられる小島莊明先生（昭和40年卒）に御指導いただき、「DNA配列による芽殖孤虫の系統分類学的研究」で学位を取得いたしました。大学院修了後、平成7年4月に杏林大学医学部公衆衛生学教室に助手として採用していただき、公衆衛生学領域での仕事を開始し、講師、助教授を経て、平成19年4月に昭和大学医学部公衆衛生学教室（現衛生学公衆衛生学講座）教授として着任いたしました。なお、その年に千葉大学医学部を卒業した田啓樹先生が令和元年10月に助教として講座員に加わってくれました。

学生教育におきましては、公衆衛生学に該当する「保健・医療・福祉と介護」のほか、「環境衛生」、「臨床疫学」などを担当しております。学生時代に劣等生であった自分が学生に講義をしていることに疑問を持ちつつ、成績不振者について熟知しているメリットを活かしております。現在、昭和大学医学部は学修成果基盤型教育の導入に伴い、カリキュラム改編が進行中で、上記の担当科目につきましても、すべて統合した上で、知識の伝授はオンライン（オンデマンド配信）、その知識を活用した実習・演習をオンサイトで行うことになる予定です。

研究につきましては、長寿関連ミトコンドリアDNA多型と生活習慣との健康状態への相互作用をテーマとして進めて参りましたが、その過程でコーヒー飲用について着目するようになったこともあり、今後はコーヒー飲用を中心として研究を展開したいと考えております。

以上、現況も含めて自己紹介をさせていただきました。令和2年4月に医学部長を拝命したこともあり、現在は昭和大学においても理事の末席に名を連ねております。組織運営のイロハを学び始めたばかりですので、東京あのはな会の理事として、会の運営、活動にどれほど貢献できるか不安であります。今後は会員の先生方より御指導、御鞭撻を賜り、役目を果たしたいと思っております。

新理事よりご挨拶



沖永眼科クリニック 院長 沖 永 聡 子
(平成3年卒)

平成3年卒業の沖永聡子と申します。この度、岡本会長、井上副会長両先生の御指名により理事を務めさせていただくこととなりました。病診連携を担当致します。東京ゐのはな会会員皆様の日々の診療にお役に立てるよう努力してまいる所存です。

昔も今も千葉大学医学部に入学する学生のうち半数以上が東京出身とのこと、例に漏れず私も東京都板橋区出身です。在学中は軟式テニス部に所属し、コートばかりにいて真っ黒に日焼けしていた女子学生でした。母が眼科を板橋で開業していたので地元の帝京大学眼科に入局し、将来は医院を継ごうかな、くらいの軽い気持ちでした。学生時代はあまり勉強しなかったのに仕事を始めてみたら思いのほか楽しく、夢中で24年間も医局に在籍してしまいました。最後は病院教授を務めさせていただきました。現在は当初の予定通り沖永眼科クリニックの院長となり、帝京大学医学部眼科学教室にも非常勤講師として籍を置いています。

20年以上前、アメリカ合衆国のミシガン大学ケロッグアイセンターに留学することになり、緑内障の遺伝子を研究しているラボに入りました。留学前もその頃流行りの分子生物学の研究室にいたので遺伝子関係ならどこでも良く、緑内障だったのはたまたまですが帰国してからも緑内障が専門ということになりました。結果的には緑内障の臨床も面白く、手術も沢山経験を積むことができ、良かったと思っています。

東京ゐのはな会には私のように千葉大を卒業後東京の医局に入局した先生と千葉大に入局してその後東京で働いている先生方がいらっしゃいます。どちらも千葉を出てしまうと千葉大の同窓生との繋がりは薄れてしまいがちかと思えます。私が帝京の研修医だった時は院内に知っている人はおらず、眼科の同期の先生が気軽に他の科の同級生にわからないことを聞いたりしているのを羨ましく思っていました。東京ゐのはな会が東京で働く千葉大出身の先生方同志の交流を深める一助になることを願っております。どうぞよろしくお願い致します。

ご挨拶



東京大学大学院医学系研究科産婦人科学講座 准教授 **甲賀 かをり**
(平成8年卒)

この度、新たに理事に選んでいただきました、甲賀かをりと申します。渉外担当をいたします。どうぞよろしく申し上げます。

はじめに自己紹介をいたします。高校は筑波大学附属高校出身で、千葉大学には平成2年に入学いたしました。大学時代は、医学部水泳部とMESSA（医学部英語サークル）に所属しており、水泳部では西千葉キャンパスのプールで泳いだこと、MESSAではサークル会館の部室でディベートやスピーチの準備をしたこと、加えてどちらでも先輩や後輩と連日飲み会をしていたような記憶（ばかり）があります。

進路は、手術に興味があり外科を考えましたが、当時、どの外科も女性の医局員はとったことがないとのことで、悩んだ結果、産婦人科に決めました。しかし産婦人科もどういうわけか千葉大では歓迎されず（私が成績不振だったせいでしょうか）、あちこちの大学に見学に行った結果、東京大学にお世話になることに決め、卒後からこれまで、現在の所属でお世話になってきています。

東京みのはな会の先生方には、2019年1月の集会で発表の機会を頂戴し、多くの先生方とご挨拶させていただきました。その際にもお話をさせていただきましたが、これまで私は特に子宮内膜症という疾患を専門に臨床・研究を行ってまいりました。したがって産婦人科のサブスペシャリティーの中では生殖医学が専門になりますが、周産期医学や悪性腫瘍にも興味があり、幅広く仕事をしてまいりました。また、学会活動・教育・研究活動を通して、他診療科・基礎研究者・製薬会社・厚労省・国会議員からベンチャー企業まで国内外に多方面のネットワークを持っております。

この度、渉外担当ということで、ご推挙いただき大変光栄に存じます。上記のような交流関係を活かし、少しでも東京みのはな会のお役に立てるよう尽力したいと存じます。わからないことばかりですが、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新理事よりご挨拶



柳沢クリニック院長
国立国際医療研究センター客員研究員

柳 沢 如 樹
(平成 15 年卒)

この度、東京ゐのはな会の広報情報部の理事を拝命した、平成 15 年卒の柳沢如樹（やなぎさわ・なおき）と申します。このような貴重な機会を頂きました岡本和久先生、井上賢治先生をはじめ、東京ゐのはな会の皆様から心から感謝申し上げます。微力ではございますが、精一杯尽力したいと存じます。

私は大学卒業後、がん・感染症センター都立駒込病院で内科臨床研修を選択し、その後同病院で感染症科医長・院内感染対策室長として病院内の感染診療・管理業務に従事しました。その後、米国ハーバード公衆衛生大学院で公衆衛生学を学び、帰国後は国立国際医療研究センター国際医療協力局に在籍し、グローバルヘルスを実践してまいりました。2019年に新宿区で叔父のクリニックを承継致しましたが、キャリアの大半を感染症の臨床・研究・教育に携わってきました。

2020年からパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症は、日本のみならず世界に甚大な被害をもたらしております。本稿を書いている2021年8月11日現在、日本は第5波の真っただ中で、連日の患者数の増加で医療は危機に直面しております。これまで感染症に携わった経験を活かし、東京都児童館職員等研修、東京都北区教育委員会、東京都看護協会などからの依頼で、新型コロナウイルス感染症を含む感染症に関して講演する機会を頂きました。さまざまな情報が氾濫する中でも、科学的知見に基づいた、医学的に正しい情報を引き続き患者さんや地域の皆様に提供していきたいと思っております。

まだまだ先が見えない状況が続きますが、これまで以上に地域の皆様の健康を守れるよう、倍旧の努力を重ねてまいります。皆様におかれましては、診療で大変な日々をお過ごしだとは思いますが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（柳沢クリニックホームページ：<https://www.yanagisawa-clinic.org>）

新理事よりご挨拶



北里大学医学部衛生学単位 講師
 千葉大学（予防医学センター助教（非常勤）・墨田 Design Research
 Institute（研究員）・順天堂大学（非常勤講師）

武藤 剛
 （平成 19 年卒）

この度、新理事（総務担当）を拝命致しました武藤と申します。会長岡本先生はじめ多くの先生方に御礼申し上げるとともに、僭越ながら私の役割の使命を述べ御挨拶とさせていただきます。

卒業後 15 年と青二才の若輩者としての私の役割は、ひとえに、千葉大学医学部卒業生の草の根ネットワークを構築して共助相互扶助の基盤をつくり、ひいては千葉大学医学部のブランド価値を高めることにあると考えています。


卒業後、国立国際医療センターでの初期研修、慶大での大学院、順大と Harvard T. H. Chan School of Public Health でのポスドク、そして現任地北里大学と、国内外のアカデミア医育機関での Alumni 活動を目にしてきました。若手への支援、同窓の共助互助、基礎研究を含め異分野協働によるシナジーや広報、母校ブランドのクレジットカード発行など各校のカラーをもとにした様々な取り組みがみられます。ひるがえって本会に、「ぬのはな」という共通の礎から都内各地で活躍し、また地球規模でグローバルに輝く多様な人材が「繋がり互いに利する」多くの機能をもたせることは夢ではないと思います。

COVID-19 パンデミックのこの 2 年、これほど先が見通せず、旧来の価値観にとらわれない横串の協働が求められる時代は、この半世紀ありませんでした。コロナに向き合い奮闘する同窓の先生の報道を目にすることも少なくありません。「受援力」という言葉が、災害が多発するようになったここ 10 年ほど聞かれるようになりました。「千葉大 x x 年卒の者ですが、x x でお願いしたいことがあります」という困りごとを解決するプラットフォームは、災害が多発する国難の期にまさにいま求められるものです。私自身も、本会の先生方のネットワークのご支援を賜り、2021 年度に開校した千葉大学墨田キャンパス Design Research Institute で、ヘルス SDGs デザインの仕事を開始し、墨田保健所のコロナ関連業務のうち 0 次予防（室内換気とエアロゾル可視化）・1 次予防（スマホ位置情報ビッグ


データを用いた人流分析)に関する行政協働事業を行っています。

本会の基盤づくりとグローバルな発展、そして宇宙時代に通じるブランド力発信に向け尽力して参ります。何卒諸先輩先生方のご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。


【QRコードをスマホカメラでかざすとURLに自動で飛びます】

コロナ0次予防/
換気エアロゾル可視化 




コロナ1次予防/人流分析
(DRI 花里真道准教授共同) 



コロナ2次予防/
遠隔聴診ドライブスルー 



コロナ3次予防/
BCPとしての両立支援 



新理事就任の挨拶



昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座 助教 田 啓 樹
(平成19年卒)

この度、新しく理事をさせて頂くことになりました平成19年卒の田 啓樹と申します。現在は昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座に所属しております。当講座は小風暁教授も千葉大卒（平成2年）です。

まず簡単に自己紹介をさせていただきます。大学時代はバスケットボール部に所属しておりました。卒業後は2年間アメリカのサンフランシスコに留学し、語学研修と現地の病院でobservershipを行っておりました。平成21年4月より国立国際医療研究センター病院で初期研修を行い、平成23年4月からは同病院で、整形外科医として後期研修を行いました。整形外科では特に小児整形外科を専門とすることを決め、平成26年4月からは心身障害児総合医療療育センターへ移り、障害をもつ児への治療を中心に行っていました。その後臨床研究への興味が増し、本格的に研究手法や統計学を学ぶためアメリカ Oregon State Universityへ留学し、令和元年の6月に Master of Public Health を取得しました。共通の知人を通して小風教授を紹介いただき、同年10月より昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座にて勤務しております。自分の背景を生かして小児整形外科領域の疫学を中心に研究を行っております。教育に関してはまだ不慣れではありますが、自分が学生時代のことを思い出しながら少しでも学生に興味を持ってもらえるよう試行錯誤しながら行っております。国際化と英語教育のワーキンググループにも参加しており、医学英語教育にも力を入れております。

これまで東京るのはな会に参加する機会が無く、しっかり貢献できるか心配ではありますが、精一杯努めてまいります。バスケットボール部の先輩からお声掛けを頂き、令和2年9月より千葉県リハビリテーションセンターで小児整形外科の非常勤医師としても勤務させて頂いております。大学卒業後からしばらく大学との関わりが無く、寂しい気持ちもありましたが、段々と大学との関わりが増えてきていることを嬉しく思っております。至らない点が多々あるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

人との出会いに繋がる プラットフォームを目指して



国立成育医療研究センター こころの診療部 医師 千先園子
(平成 21 年卒)

新理事としてお手伝いさせていただきます平成 21 年卒の千先園子と申します。未熟者にも関わらず、大役を仰せつかり大変恐縮しておりますが、何卒ご指導宜しくお願い致します。

・自己紹介

千葉大学卒業後は東京医療センターで初期研修、国立成育医療研究センターで小児科研修、都立小児総合医療センターでの小児発達行動、児童精神科と、都内で勉強をしてきました。小児臨床に携わる中、疾病構造が大きく変わり、バイオサイコソーシャルな支援が重要になっている事を実感し、「病院の中で待っているだけでは救えない子もいるのではないか」問題の上流、病院の外にアウトリーチする小児科医も必要なのではないかと課題意識を持ちました。そこで、問題の上流への橋渡しに貢献できる小児科医を目指して精進しています。家族の事情もあり、香港大学で公衆衛生修士、シンガポール大学で疫学研究室、新生児発達科臨床と 4 年半の海外勤務を経験しました。2019 年からは帰国し都内に戻り、厚生労働省で医系技官として勤務を始めました。入省後は子ども家庭局母子保健課で、「成育基本法」という子どもの切れ目ない包括的な支援を目指す新しい法律の社会実装に向けた政策の企画立案や事業運営に関わり、大きなやりがいを感じてきました。2021 年からは環境省リスク評価室でエコチル調査という 10 万組の親子の大規模長期出生コホート調査を担当し、EBPM の方策について考えました。プライベートでは 3 児の親で賑やかな日々を送っています。

・抱負

このように、国や働く領域を移動し、比較的イレギュラーな働き方をしてきた私ですが、今振り返ってみると、いつも人との出会い、ご縁が導いてくれたなあ、と感謝の気持ちでいっぱいです。卒後何も千葉大学に貢献できてこなかった私なんぞに対しても、様々な場面で同窓の先生には温かいお声がけやアドバイスをい

ただき、その懐の深さに感激したり、とても励まされてきました。本同窓会で、様々な人との繋がりが生まれ、新しい機会や学びを推進するプラットフォームのような場を作っていけたらいいなあと愚考しています。

また、総会では多様なキャリアについての話題もあがりました。変化が大きく、課題も複雑化している今だからこそ、ハシゴ型だけでなくジャングルジム型のようなキャリア観もあっていいのではと勝手に感じています。様々な出会いによるプラットフォームが、分野横断的・学際的な取組みなど多様性の応援に繋がることも夢想しています。

最後になりましたが、私のような未熟者に貴重な機会を頂戴していることを心から感謝申し上げます。敬愛する母校と同窓の先生方に少しでも恩返ししていただけるよう精進していきたいと思っておりますので何卒ご指導宜しくお願い申し上げます。

新たに教授等に就かれた先生方より

日本医療安全調査機構 (医療事故調査・支援センター) の役割



日本医療安全調査機構 専務理事 矢島 鉄也
(昭和 57 年卒)

昭和 57 年卒業の矢島鉄也と申します。2020 年 6 月より、一般社団法人日本医療安全調査機構の専務理事をさせていただくことになりました。

大学卒業と同時に厚生省（当時）に入省し、卒後研修を千葉県立救急医療センター、千葉県中央保健所で行い、昭和 59 年 4 月から厚生省本省の勤務になりました。厚生省では、救急医療専門官、医療課企画官、精神保健福祉課長、生活習慣病対策室長、厚生科学課長、国立がんセンター運営局長、国立成育医療研究センター企画戦略室長、大臣官房技術総括審議官、健康局長を務め 2013 年 7 月に退職しました。2014 年 4 月から千葉県病院事業管理者（病院局長）に就任し 2020 年 3 月まで 6 年間勤めました。

2015 年 10 月より改正医療法において「医療事故調査制度」が施行され、「一般社団法人日本医療安全調査機構」は、医療法第 6 条の 15 の規定に基づき「医療事故調査・支援センター」として厚生労働省大臣の指定を受け、医療事故調査の相談・支援、院内調査結果の整理・分析、医療事故の再発防止のための普及・啓発等の取組などを行っています。今年で制度施行から 6 年を迎えました。医療事故調査制度について、誤解をお持ちの方がいらっしゃるので、この場をお借りしてご説明をさせていただきたいと思います。

医療事故調査制度は医療法第 6 条の 11 で規定されています。本制度は医療の安全のための再発防止を目的とし、医療機関が自主的に原因を調査し、再発防止に取り組むことを基本としており、責任追及を目的としたものではありません。事故の根本にある原因を分析し、前向きな再発防止策を策定するために医学的見地から分析を行うもので、法的な観点からの分析ではありません。本制度の対象となる「医療事故」は「当該医療機関に勤務する医療従事者が提供した医療に

起因する（又は起因すると疑われる）死亡又は死産（2015年10月1日以降のもの）」であって、「当該医療機関の管理者が当該死亡又は死産を予期しなかったもの」の双方に該当するものです。事故か否かの判断は、医療機関の管理者自らが行うもので、強制的な制約を置くものではありません。

	医療に起因し、又は起因すると疑われる死亡又は死産	左記に該当しない死亡又は死産
管理者が予期しなかったもの	制度の対象事案	
管理者が予期したもの		

ここで、医療事故調査の流れについて説明をさせていただきます。

①「医療事故」の判断・報告

「医療事故」に該当するかどうかの判断は、医療機関（病院、診療所（歯科を含む）、助産所）の管理者が行います。「医療事故」に該当するかどうかについては、管理者が組織として判断し、該当すると判断した場合は、遺族へ説明した後、センターに医療事故発生の報告をします。医療過誤の有無によって決定されるものではありません。管理者は「医療事故」と判断した場合は、この報告を行うことが義務付けられています。遺族が「医療事故」としてセンターに報告する仕組みとはなっていません。

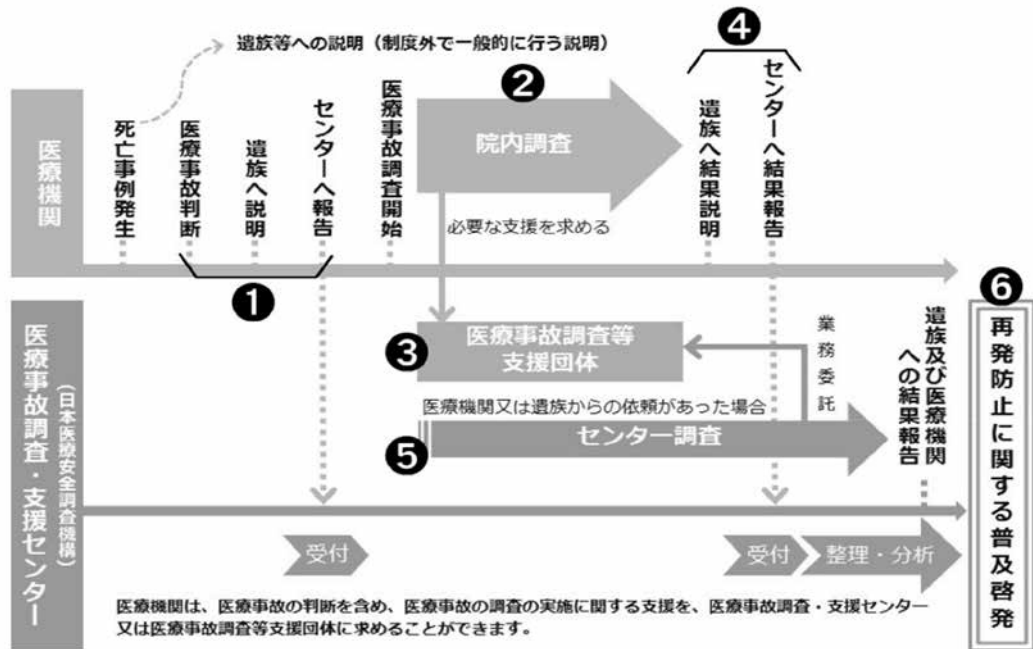
この「予期せぬ死亡」の判断は、管理者が行うことになっているのですが、管理者が医療事故調査制度に係る研修への参加が少ないことから、管理者の出席を促す方策を検討することが求められています。そして、医療事故報告の件数には都道府県格差があるので、教育研修の重要性が指摘されています。

②医療機関が行う「院内調査」

院内調査を行う際は、中立性、公正性を確保するため、医療事故調査等支援団体（③で詳しく説明）の支援を求めることが大事であり、原則として外部の医療の専門家の支援を受けながら調査を行います。

自ら行う「院内調査」のプロセスそのものが、医療機関の医療の質の向上に繋がると考えられています。院内調査を経験することで、当該医療機関の内部での情報共有・相互理解と連携、医療機関と関係する外部の支援団体、学会と連携・協力することで、医療現場における医療の質・安全の向上が図られることが期待

医療事故調査の流れ



されているのです。

③ 医療事故調査等支援団体による支援

医療事故調査等支援団体とは、医療機関が院内調査を行うにあたり、必要な支援を行う団体で、都道府県医師会、大学病院、各領域の医学会など、複数の医療関係団体で構成されています。支援内容としては、医療事故の判断に関する相談、調査手法に関する相談、助言、院内事故調査の進め方に関する支援、解剖、死亡時画像診断に関する支援（施設・設備等の提供含む）、院内調査に必要な専門家の派遣、報告書作成に関する相談、助言（医療事故に関する情報の収集・整理、報告書の記載方法など）などです。

④ 院内調査結果の説明・報告

院内調査が終了したところで、医療機関は調査結果を遺族に説明し、センターに報告をします。遺族へは「センターへの報告事項」の内容を分かりやすく説明することが求められています。説明する項目は、医療事故の日時、場所、状況（疾患名、臨床経過等）など、報告時点で把握している範囲について説明することになります。従って、その時点で不明な事項については不明と説明することになります。遺族には、口頭又は書面など遺族が希望する方法でわかりやすく説明することになります。なお、センターは院内調査に関することについて遺族に連

絡することはありません。

⑤センター調査

医療機関又は遺族がセンターへの調査を依頼した場合、医療事故としてセンターに報告された事案について、センターは必要な調査を行います。

調査の依頼があった場合、センターでは総合調査委員会（毎月開催）において、新規事例の調査方法を検討し、調査を依頼する関係学会を決め、関係学会に個別調査部会の委員の推薦を依頼し、推薦を受けた委員について利害関係がないことを確認した上で委嘱し、個別調査部会を設置いたします。センター調査報告書は、個別調査部会と総合調査委員会の共同名義で作成し、個別調査部会と総合調査委員会との関係は、権限等の上下関係はなく、対等の立場で、双方の意見を尊重し、必要な部分を補完することで報告書を取りまとめます。個別調査部会は、当該事例について、医学的、専門的な立場から、当該医療機関等の状況も考慮した上で具体的な検証を行います。総合調査委員会は報告書が遺族にも理解しやすい文章や内容となっているかなど社会的見地から確認します。その後、総合調査委員会の承認を得て、センターは調査結果を医療機関と遺族に報告します。

⑥再発防止に関する普及啓発

センターは、医療機関から集積した情報に基づき、個別事例ではなく全体として得られた再発防止に関する知見を情報提供します。センターへの調査結果報告の内容については、再発防止策の検討を充実させるため、必要に応じて、センターから医療機関に確認・照会等を行うことがあります。

センターに報告された貴重な複数の死亡事例から、類似事例を集積し、整理・分析することで得られた知見に基づき、予期しない死亡を回避するという観点から、再発防止策を情報提供します。再発防止策は、再発防止と医療安全の確保を目的として情報提供されるものであり、係争等の解決の手段として利用されることを目的としているものではありません。

本制度は、医療法に基づき、予期しない死亡の原因を調査し、再発防止を図る制度ですが、死亡原因を調査して死亡事例から学ぶ、ということが制度化されるまでには、長い年月と経験を要した経緯がありました。制度開始以降、院内調査を主体とする本制度全体で医療の安全を担う、という理念は少しずつ浸透してきております。患者の高齢化、日々進歩し複雑化する医療の中で起こる医療事故の原因には、医療が有する不確実性や、ヒューマンエラーを防ぐシステム構築の難

しさがあります。原因への対応や考え方も常に変化し、複雑化しているといえます。

この制度が始まってから6年間で協力学会から延べ1000名を超える多くの専門家に調査に参加していただきました。多くの専門家にセンター調査を知っていただくことで、事故調査制度の取組が全国に普及し広まりつつあると実感しています。

総合調査委員会の委員には同期の中村清吾先生（昭和大学医学部乳腺外科主任教授）が、再発防止委員会の委員長に松原久裕先生（千葉大学大学病院先端応用外科教授）が就任されており、いろいろと相談に乗っていただけるので心強い限りです。

今後、学会推薦だけでなく、地域の医師会などの医療事故調査等支援団体と連携して大学病院などの特定機能病院、地域中核病院などに勤務する医療安全部門の医師にも調査に参加していただくことで制度の理解が更に広まるのではないかと期待しています。

制度の詳しい内容は、日本医療安全調査機構のホームページを見ていただくと、院内調査の進め方の資料、病理解剖の家族への説明資料などを入手することができます。是非、ご活用いただけると幸いです。

新たに教授等に就かれた先生方より

JCHO 理事に就任しました



独立行政法人地域医療機能推進機構 病院支援担当理事 **山本 修一**
(昭和 58 年卒)

2021 年 4 月、独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO、ジェイチャーではなくジェイコーです）に移り、コロナで大活躍の尾身茂理事長のもとで病院支援担当理事を務めています。定年まで 2 年を残していましたが、眼科教授に就任して 18 年、千葉大学病院長を 6 年務めて自分なりに「やり切った」感があったこと、そしてなにより、頭がすっかり錆びついてしまい、このままアカデミアで老醜を晒すよりは、若く有能な後進に道を譲るべきとの思いから転身を決めました。

JCHO は 2014 年に年金改革の一環として、社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院を統合する形で、いわば「天上がり」するように成立した組織です。全国に 57 病院、15,000 ベッド、25,000 名の職員を擁します。潤沢な年金会計で「おらかな（放漫な）」独自経営を続けてきた病院が大半であり、統合にあたってはかなりの苦労があったと聞いています。

私の役割は本部と現場、あるいは現場と大学のリエゾンであり、コロナ禍で思うに任せないものの、この半年で関東地方を中心に 16 病院を訪れ、病院長など現場の皆さんの話を伺ってきました。あわせて国立大学病院長会議の会長を務めていた頃の人脈を活かして、関連する大学の学長や病院長との連携強化も図っています。

さらに最近では、首相官邸からの強い要請を受けて、東京城東病院をコロナ専用病院化することとなり、その統括も担当しています。城東病院は千葉大昭和 62 年卒の中馬敦先生（整形外科）が病院長を務めており、他の JCHO 病院の院長が専用病院化を強く拒むなか、院内スタッフをしっかりと取りまとめて、この難しいプロジェクトを進めています。8 月末の決定からわずか 1 ヶ月で準備を完了し、

9月30日には最初の患者を受け入れています。また東京高輪病院の赤倉功一郎先生（千葉大 昭和 59 卒）、溝尾朗先生（昭和 63 卒）、清水秀文先生（平成 11 卒）をはじめ多くの同窓の先生方には、職員研修など多方面にわたるサポートをいただき、城東病院にとって（私にとっても）強いお守り（心の支え）となっています。

もちろん千葉県には、船橋中央病院と千葉病院という JCHO の要とも言える病院があり、どちらも千葉大にご支援いただいています。船橋は建物がとても古く（昭和 40 年建設！）、建て替えが急がれるのですが、場所が確保できずにいます。一方、千葉病院は今年から建て替え工事が始まり、透析のメッカという強みを活かして地域医療へのさらなる貢献を目指しています。

JCHO は 200 床未満の中小病院が大半であり、どこも経営に苦しんでいます。しかし JCHO という公的病院としてのブランド力や地域密着の長い歴史があり、今後は地元大学病院との連携をさらに強めることで、新たな立ち位置を獲得できるのではないかと考えています。先生方のお知恵とお力添えをいただければ幸いです。よろしくお願い申し上げます。

新たに教授等に就かれた先生方より

帝京大学医学部附属溝口病院
病院教授就任のご挨拶帝京大学医学部附属溝口病院外科病院教授 三浦文彦
(平成3年卒)

平成3年卒の三浦文彦です。令和2年4月1日付で帝京大学医学部附属溝口病院外科病院教授に着任しました。ご依頼をいただきましたのでご挨拶をさせていただきます。

学生時代は、硬式野球部に所属し学部1年から雄翔寮に入寮しましたので、いわゆる亥鼻原人状態で全く講義に出席しないという不真面目な医学生でした。学部3年の後半から勉強に精を出したお陰で、何とか帳尻を合わせて6年で医師免許を取得することができました。医学部生活においては硬式野球部部長の故高橋英世教授（小児外科、昭和32年卒）の存在が大きかったと記憶しています。卒業式の後に同級生5人とともに金寿司に飲み連れて行っていただいたのですが、その席で高橋教授から、「今まであんた達に勉強しろとは決して言わなかったが、医者になってからは患者さんの命を預かるんだから、一生懸命勉強しなさい。」というお言葉をいただきました。確かにその時まで高橋教授から勉強しなさいと言われたことはなかったですし、むしろ（勝手に解釈していたのだと思いますが）あまり勉強はしなくていいと聞かされていたと記憶しています。リベラルな教育をしてくださった先生を裏切ってはいけないと心に誓いました。

卒業後すぐに千葉大学第二外科（現先端応用外科）に入局しました。胆管癌の画像診断で学位を取得した後、平成12年4月に関連病院から帰局しました。肝胆膵外科医を志していたものの臓器再編のため第二外科では肝胆膵をできなくなることになり身の振り方について悩んでいましたが、落合武徳教授（昭和41年卒）のお計らいで平成15年8月から落合教授と千葉大同期の帝京大学外科高田忠敬教授（昭和41年卒）の下で研鑽を積むことになりました。

私は、学生時代の不勉強のせいで基礎医学に苦手意識があったためずっと臨床

畑を歩んできました。平成 17 年に第二外科の症例をまとめて、脾動静脈非温存脾温存腓体尾部切除術後に胃静脈瘤が高率に発生することを示して、この術式は避けるべきと結論付け Surgery 誌に報告しました。この論文は多くの論文で引用されましたが、その後の長期経過観察の結果、胃静脈瘤出血は 1 例にも発生しなかったことが明らかになりました。そこで状況によっては容認できる術式であると結論を改めて、letters to the editors に投稿しました。論文採択後に同誌の編集委員長からメールがあり、自分の研究結果や主張を改めて報告する研究者は少ないので、それを実行したことは称賛に値すると述べられていました。大変感激したとともに、これからも臨床上の興味と疑問点に基づいた研究と真実に忠実な研究姿勢を貫いていこうと決心しました。腓胆道外科の臨床研究を継続してきましたが、最新の胆道癌診療ガイドラインに小生が筆頭著書の論文が 4 編引用され、研究姿勢は間違いではなかったのではないかと自負しております。

学会活動では、高田教授が日本肝胆膵外科学会の創立者・理事長だったため、事務局幹事と英文機関誌である Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Surgery (JHBPS) の associate editor を務めるという貴重な経験をすることができました。事務局幹事としては、肝胆膵外科学会高度技能専門医制度の規則・細則と申請書類の作成や法人化に当たり定款の作成に携わるといった事務的作業に従事しました。さらには、本邦の外科手術の 95% をカバーする National Clinical Database のデータを用いた同学会の最初の研究を担当させていただき、本邦の肝胆膵外科の集約化の現状と肝胆膵外科学会高度技能専門医制度の意義についてまとめて JHBPS に報告する機会を得ることができました。JHBPS の associate editor は、平成 20 年から現在も続けていますが、4,000 編近くの投稿論文の査読業務に携わりました。多くの時間を費やしてきましたが、accept される論文の特徴や査読者目線での評価を学ぶことにより、自身の論文執筆にフィードバックすることができました。JHBPS のインパクトファクターは、この間に 1.182 から 7.027 に飛躍し大きな励みになっています。

当院は昭和 48 年 7 月に開院し平成 29 年に 5 月に隣接地に新築移転しました。病床数は 400 床です。以前は本邦の腹腔鏡下手術発祥の地として有名でした。最大のアピールポイントは東急田園都市線で渋谷から 18 分の高津駅より徒歩 1 分というロケーションです。現在は新型コロナウイルス感染予防のため自動車通勤が主ですが、まさか自分が山手線と東急田園都市線を乗り継いで通勤することになるとは予想だにしませんでした。病棟からはセレブの町として人気の二子玉川駅前のショッピングセンターと何かと話題の武蔵小杉駅周辺のタワーマンション群を近

くに眺めることができます。着任から1カ月間は新型コロナの影響でキャンセルがあったこともあり肝胆膵外科手術は0件でした。どうなっちゃうんだろうという不安が少しよぎりましたが、充電・準備期間と位置づけセットオーダーを作成したり、器械類を確認しながら来るべき時に備えました。幸いにして翌月から手術の予定がコンスタントに入るようになりました。膵切除と肝切除の第1例目を施行する前に看護師さん向けの勉強会を開催してから臨むなど、まさに“立ち上げ”という感じでした。その後症例数は順調に増え忙しい毎日を過ごしております。今後は、後進の指導に励みつつさらに症例数を増やして肝胆膵外科学会高度技能医専門医修練施設の認定を得たいと思っております。

2015年から東京ゐのはな会の理事を拝命しています。岡本会長をはじめとする理事の先生方には、私の去就についてご心配とご配慮をいただき大変感謝致しております。この場を借りてお礼させていただきます。勤務先は神奈川県となりましたが、東京在住のため引き続き理事を務めさせていただくことになりました。今後も東京ゐのはな会の発展のために微力ではありますが貢献させていただく所存ですので、同窓会の先生方におかれましては今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

新たに教授等に就かれた先生方より

産科麻酔の普及を目指して



昭和大学医学部麻酔科学講座 教授 加藤 里 絵
(平成4年卒)

このたび、東京るのはな会にお世話になることとなりました。ご挨拶を申し上げます。

私は東京都渋谷区で育ち、1992（平4）年に千葉大学を卒業、麻酔科に入局いたしました。千葉県内の病院にて麻酔科研修の後、英国オックスフォード大学の博士課程に進みました。心臓血管麻酔科医あるいは集中治療科医を目指しつつ帰国しましたが、まもなく産科麻酔に出会いました。ある当直の夜、若い妊婦さんの緊急帝王切開術中に大量出血をきたしたことがきっかけです。一晩中、麻酔管理に難渋したのですが、その一番の原因は、自分の産科麻酔の知識と経験が絶対的に不足していたことでした。

その後、埼玉医科大学総合医療センター、東京女子医科大学八千代医療センター、北里大学にお世話になり、2018年7月に昭和大学に着任いたしました。千葉大学の麻酔科に入局したころには、将来、東京で勤務することは想像していませんでしたが、ご縁（はたまた運命か？）とは不思議なものです。

さてここで、私の専門である産科麻酔について少しお話をさせてください。産科麻酔科医というと、それは産科医ですか？それとも麻酔科医ですか？と尋ねられることがあります。産科麻酔科医は産科医療に関わる麻酔関連の業務を担う麻酔科医です。産科麻酔としての最も代表的なのは、帝王切開術や無痛分娩の麻酔ですが、近年増えている生殖補助医療における麻酔、妊娠中の非産科手術の麻酔も担います。産科医療を担う者の中では“Obstetrics is a bloody business”と言われますが、産後出血は予期できないところでも起こり、母体急変の最大の原因です。母体急変の初療を行うことも産科麻酔の大きな役割です。また大学病院などの規模の大きな総合病院では、合併症を持つ産婦さんが増えています。最近

特に増えているのが先天性心疾患合併妊娠です。妊娠中から周産期にかけての心イベントに対応すべく、産科麻酔科医もチームの一員となっています。

麻酔科学は20世紀に入って確立された領域で、医学の中ではヒョッコです。さらにその麻酔科学の中でも産科麻酔科学は歴史が浅く、特に日本では心臓血管麻酔、小児麻酔などと比べてその認知が遅れました。まだまだ産科麻酔を専門にする麻酔科医は少なく、専門研修ができる施設も限られているのが現状です。その産科麻酔の新たな拠点を築くことが私の使命です。幸いなことに、東京では順天堂大学の岡田尚子先生（平8）、都立多摩総合医療センターの田辺瀬良美先生（平9）という産科麻酔科医がすでに活躍されていらっしゃる、心強い限りです。

「今日を楽しみたいなら、花を買いなさい。1年後を楽しみたいなら、花を植えなさい。10年後を楽しみたいなら、木を植えなさい。100年後を楽しみたいなら、人を育てなさい」というのは、私の座右の銘です。100年後を楽しむために人を育てたいという想いを大切にしてきました。しかし時代の移ろいがどんどん速まる中、100年後を見通すことはおろか、10年後を予測することさえ、今の私には容易ではありません。昭和大学に赴任して3年。5年後を見据えながら、産科麻酔の人材の育成と診療と研究の体制強化に励む毎日です。

時代の変化が加速した要因の一つは、ネットを用いて情報伝達が容易にできるようになったことです。以前は直に顔を合わせないと人との繋がりを持ちにくかったのですが、今ではメールやSNS、Webミーティングを使うことで、物理的な距離がどんなに離れていても人と人との関係が構築できるようになりました。そんな今こそ、人とのネットワークを広げ密にし、情報交換を促進する絶好の機会です。東京ゐのはな会はその重要な基盤組織と考えております。

歴史のある、東京ゐのはな会のさらなる発展をお祈りしております。微力ではありますが、東京ゐのはな会のお役に立てるよう努めてまいりたいと思います。ご指導のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

卒後、節目の年を迎えて



卒後10年、20年……と10年ごとに、節目の年をお迎えになる先生方に思いを綴っていただきました。

大学を卒業してから様々な分野で活躍されている先生方の、それぞれの人生や思いをお届けいたします。

ご多用の中、ご執筆いただきました先生方には心より感謝申し上げます。

卒後 60 年を振り返って



岩倉病院 名誉院長 **岩倉 弘毅**
(昭和 37 年卒)

昭和 37 年 (1962 年) に卒業し、1 年間のインターン後、第 34 回医師国家試験を受けました。当時の国試は、筆記試験と面接でした。筆記試験は、穴埋めと二者択一などで、面接も軽く簡単で、硬式野球部とスキー部に所属し、ろくに勉強しなかった私でも合格できるような問題でした。私が落第しなかったため、我が学年百パーセントが合格した事は、自慢できる事です。昭和 38 年に御園生教授の産科婦人科教室の大学院に進み、三浦教授の生化学教室に出向し、研究の指導を受けました。テーマは、マウスの子宮頸癌の核酸代謝でした。

昭和 39 年に、東京オリンピックが開かれ、東洋の魔女が金メダルを獲得する等、日本人が活躍し、日本中が湧きました。今回のオリンピックは、コロナ禍で無観客との事、どうなるのでしょうか？

昭和 40 年に、縁あって、小岩の岩倉産婦人科医院の長女と結婚、翌年長女が生まれました。

昭和 42 年に大学院を修了し、お礼奉公として、秋田県能代民生病院へ出張、9 月に長男を得ました。過労と酒で、急性肝炎になり退職しました。

昭和 46 年にニューヨーク州立大学に私費留学し、ネルソン教授の指導で卵巣がんの研究をしましたが物にならず、昭和 47 年末帰国し翌年 1 月から岩倉医院に就職。同時に医師会に入会し、地域医療や医師会活動に参画しました。それから今日まで、色々な事がありましたが、列記しますと、日本思春期学会発表・シンポジスト。江戸川看護高等専修学校校長。次いで専門学校校長、東京産婦人科医会常務理事、副会長、東京地方裁判所民事調停委員、都医会医事紛争処理委員、千葉大あのはな同窓会理事、会計監事、東京支部監査、千葉大産科婦人科教室幹事、スキー部 OB、OG 会会長等。平成 25 年に、地域産科医療に貢献したことで、厚生労働大臣表彰を受けました。あれもこれも、関係した皆様のご支援のお蔭と感謝する次第です。

卒後 50 年を迎えて



介護老人保健施設 オネスティ南町田 施設長 **菊池 友允**
(昭和 47 年卒)

昭和 47 年卒の菊池です。定年まで、外科医として勤務し、今年で卒後 50 年となります。現在は老健管理医師として高齢者医療に関わっています。私は卒業後大学を離れ、大先輩である中山恒明先生が創設された東京女子医大消化器病センター外科に入局しました。当時医局には多数の千葉大卒の先生方がいらっしゃいました。外科医としての基礎をたたき込まれ、多くの臨床経験を積むことができました。その後女子医大第二病院外科に移り、平成 2 年に矢沢知海先生が院長をされていた都立府中病院に移りました。ここでも千葉大出身の医師が多く在籍していました。平成 8 年から東京都保健医療公社多摩南部地域病院に外科部長として勤務。平成 17 年 4 月、東京都多摩老人医療センターから公社病院に変わった多摩北部医療センターに副院長として転任し、平成 20 年からは院長として勤務しました。折しも清瀬小児病院が、移転統廃合される時期に当たり、地域の小児救急医療を担うことが求められ、小児医療体制整備が急務でありました。平成 3 年卒の小保内君たちと苦勞した事を思い出します。平成 24 年 4 月に東京都がん検診センター所長として転任。その後、平成 27 年 4 月より介護老人保健施設「オネスティ南町田」の施設長として勤務しています。当初戸惑う部分もありましたが、明日は我が身ということを胸に頑張っています。昨年春からは、コロナ禍で気が抜けない生活が続いています。6 月上旬に入所者のワクチン接種が完了し、7 月中旬に職員の接種が完了します。東京ではコロナ新規感染者が急増し緊急事態宣言が再発出される中、オリンピックは開催に向け進んでいます。国の施策にちぐはぐ感が拭えません。ワクチン接種は安心材料ですが、高齢者を預かる施設としては心配が募ります。早期の収束を望みます。卒後 50 年、いろいろな場面で同窓の先生方にはお世話になってきたと思います。今後とも宜しくお願い致します。

卒後 40 年を迎えて



自警会東京警察病院 泌尿器科部長・前立腺がん治療センター長 **松島 常**
(昭和 57 年卒)

先日、2 学年後輩の赤倉功一郎先生から「先生は卒後 40 年になるから執筆してくれませんか」といった趣旨のメールを受け取ったときは正直言って若干戸惑いました。といいますのは、「もう 40 年も経ってしまったか!」ということと「東京ゐのはな会」の幽霊会員の私が寄稿してもよいものかと思ったからです。赤倉先生から「これを機に出席して下さい」と言われ、執筆をお受けすることになりました。私は生まれも育ちも東京で、母方の祖父と伯父が泌尿器科医であったことから、当時筑波大学泌尿器科教授をしていた伯父の助言により東京大学泌尿器科学教室に入局しました。その後に東大大学院に進学し病理学を専攻し、「前立腺前癌病変の病理学的研究」で学位を取得しました。その翌年日本泌尿器科学会誌に「前立腺潜伏癌と異型過形成の相関」が掲載され、日本泌尿器科学会坂口賞を受賞しました。関連病院ローテーションを経て東大本院に復帰し、分院医局長を経て平成 10 年に千代田区富士見町の自警会東京警察病院に泌尿器科部長として赴任しました。その 2-3 年後に赤倉先生が東京厚生年金病院泌尿器科部長（現 JCHO 東京新宿メディカルセンター）で近所に来られたのをきっかけに交友が深まり、「神楽坂カンファレンス」という勉強会を二人で始め 20 年以上たった今も続けています。院外の活動としては「泌尿器外科」（医学図書出版）の編集幹事として、企画・編集・執筆を担当しています。また、今年 5 月に「前立腺がん治療センター」を立ち上げ、診療科の垣根をなくしたシームレスな治療選択を患者様に提供できる様にしました。64 歳になりましたが、気力・体力の続く限り、まだまだ前向きに活動していきたいと思えます。「東京ゐのはな会」にもこれを機に出席させていただきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。末筆ながら、本会の益々のご発展をお祈りいたします。

卒後 30 年目を迎えて



帝京大学医学部リハビリテーション医学講座 **緒方直史**
(平成4年卒)

平成4年に千葉大学を卒業して30年目を迎えるにあたり、僭越ですが寄稿させていただきます。コロナ禍で皆様大変な思いをされていると思いますが、原稿を書いている今は患者数も減少し落ち着いてきており、このまま収まってくれることを切に祈っています。

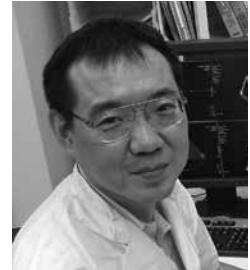
私は千葉大学卒業後、東大整形外科に入局し7年ほど関連施設を回った後に大学院に入学し、その後足かけ8年ほど骨・軟骨代謝の基礎研究をしておりました。気づいたら既に卒後15年経っており、このまま臨床も捨てがたく、当時の教授に相談した上でリハビリを兼ねて(?)東大リハビリ科に移りました。転科とは言っても、リハビリ科と整形外科はもともと切っても切れない関係で自然な流れで取り組むことは出来ましたが、当初は脳卒中などの患者さんを診るたび慣れない気持ちで診療をしておりました。リハビリの対象疾患は私の新人の頃とはとは景色が全然変わり、呼吸器・循環器疾患やがん患者までが対象となり、ほぼ全ての患者が対象となってきたと言っても過言ではありません。実際、リハビリ医療に足を踏み入れて以降、リハビリ医療の必要性や、まだまだやるべきことの多さ、可能性を多く秘めた分野であることを実感しております。最近では、ロコモや転倒防止など、予防医学の分野にも力を入れるようになってきました。特にがん患者さんの運動器管理の重要性を実感しており、「がんロコモ」を提唱して整形外科と組んで積極的にがん患者の運動器管理を行っています。

日々臨床・研究・学生教育と明け暮れています。学生時代にスキー部に所属していたこともあり、卒業後も細々とスキーは続けていました。美しい雪山に行くとスキーをするのは気分的にもリフレッシュするので良いのですが、ただ漠然と滑っていても仕方ないと思うようになり、50を過ぎてからコブ斜面を滑ることに目覚めました。モーグルと言うにはおこがましいのですが、あえて作られたコブ斜面を集中的に滑ることに楽しみを見つけ研鑽しています。骨折などの怪我を負ったら止めようと思っていますが、上から下まで一気にボコボコのコブを制覇したときは気分が良いです。リハビリ科の発展に尽力しつつ、今後10年はモーグルが続けられるよう、密かに筋力や体力を維持していこうと思っています。

卒後 30 年のことば

今までを振り返って

「Ai って知っていますか？」



Ai 情報センター代表理事 **山本正二**
(平成4年卒)

人生早いもので、54歳となりました。自分が千葉大学に入学したときには、54歳の自分が何をしているなど想像することはありませんでした。この原稿を契機にちょっと私の Ai 人生を振り返ってみたいと思います。

Ai をご存じでしょうか。最近は人工知能の AI (Artificial Intelligence) に押され気味ですが、今回のテーマは小文字の “Ai” の方です。

Ai は、CT や MRI 等の画像診断装置を用いて遺体を検査し、死因究明等に役立てる検査手法で、解剖率が3%を切った日本では、死因究明の新しい手法として注目されています。千葉大学医学部出身の作家、海堂尊先生の著書「チームバチスタの栄光」「死因不明社会」などのベストセラーでご存じの方も多いかもありません。

卒業後、私は、千葉大学の放射線科に入局しました。その後、大学を離れ、一般財団法人 Ai 情報センターを立ち上げ、損保会社や病院から依頼された医療事故関連の画像を読影しています。人生ってわからないものです。

早いもので、2010年4月に開業した Ai 情報センターも11年目に突入しました。今でこそ、医療事故調査制度が開始され、死因究明の有力な手段として Ai が取り入れられ、当たり前のように多くの医療機関で Ai が実施されるようになりましたが、ここまでの道のりは決して平坦なものではありませんでした（今でも平坦ではありませんが……）。

自分で事務所を開いてみると今まで、「千葉大学の……」という肩書きでいろいろ仕事をしていたということがよくわかりました。何しろ MR さんが全く来なくなりましたから（笑）。

当初は、遺族や医療機関からの依頼がいくつかある程度でした。最近、損害保険会社や弁護士などからの依頼や、裁判所、警察などからの依頼も増えてきています。これは、第三者機関として Ai 情報センターが認知されてきたことの査

証なのではないかと思えます。

2015年10月から医療事故調査制度も始まり、第三者機関が客観的な証拠としてAiを使う場面が増えてきました。何しろ、予期せぬ死亡事例が発生したら院内で調査をしないとイケないのです。医療事故かどうか判断するためにも、体の内部の情報がわかるAiが有用だということは、おわかりいただけることと思います。

最初の2年くらいは読影件数も少なく、お昼を食べに築地まで足を伸ばしたりする時間もありましたが、2013年夏以降損保会社からの依頼が急増し、最近では、立ち食いそばで済ませることが増えています。今はマロニエゲートと名称が変わったプランタンのそばにあるよもだそばがお気に入りです。なぜか本格インドカレーを出していて結構おいしいのです。

また、死後画像の延長ではあるのですが、即身仏などのミイラの読影をしたり、海堂先生原作のドラマの医療監修もしています。

今でも、まだAiだけで生活が出来ていません。週に2日、生体の読影バイトにいらしています。なかなか波瀾万丈の人生ですが、これからもAiを楽しんでいきたいと思えます。

最後にこんな私のわがママを許してくれた妻に感謝します。

卒業 20 年を振り返り



東京大学大学院新領域創成科学研究科
メディカル情報生命専攻
複雑形質ゲノム解析分野

鎌谷 洋一郎
(平成 14 年卒)

平成 14 年卒の鎌谷です。若輩ながら、ここに執筆する機会をいただきありがとうございます。私は千葉大で 6 年間の学生生活を過ごした後、大学病院で横手幸太郎先生に直接薫陶をいただく幸運を得、その後旭中央病院と（当時の）松戸市立病院を経験させていただきました。あんまり風呂にも入らず臭そうな時期もあったり、意外にも GF の腕を褒められたり（まあ研修段階ですので…笑）、どれも一つも欠かせないかけがえのない経験の日々で、たくさんの先生方にお世話になり、さまざまなたくさんの患者さんを診させていただく機会をいただきました。その中にはもちろん難病患者さんがいます。またコモンディジーズも、人によって病気のなりやすさも重症度も、生活歴などを考慮に入れてもなおばらついているということに気付かされました。これはなんだか不平等だと思いました。

私の卒業年というのは、ちょうどヒトゲノム配列が解読された頃です。一人当たり 30 億塩基対に及ぶゲノムデータの解析を通じて病気の多様性を解明することで、この不平等がちょっと解消するのではないかと思いました。そうするとみんなが少し幸せになるのではないかと思ったのです。そこで東京大学の中村祐輔研究室の門を叩き、ゲノム医学について学びました。中村研はいわゆるビッグラボで、さまざまな専門家が内部におり、ゲノム医学を含め、色々な意味で勉強になりました。卒業後 4 年間はフランスのパリに留学して、今度はライフスタイルの多様性についても学びました。帰国してからは理化学研究所のチームリーダーとしてゲノム解析を行いました。その後 2 年間ほど京都大学で学生教育した後、2019 年から現職に就任、コロナ禍の中、東大白金台キャンパスに引きこもっております。

これまで少しくらいは生まれながらの病気のなりやすさの解明に貢献できたでしょうか。もう少し詰めないといけないところがありそうです。人々のフラットなヘルスケア・レベルを実現する社会に向けて、引き続き貢献してゆきたいと思っています。

卒業 20 年を迎えて



公立学校共済組合 関東中央病院
耳鼻咽喉科 医長

坂田 阿希
(平成 14 年卒)

こんにちは。坂田(小西)阿希と申します。田中(荻田)純子先生にお誘いを受け、今回 20 年目の節目に寄稿させていただくことになりました。

2002 年 3 月に千葉大学を卒業してから 4 月に東京大学附属病院耳鼻咽喉科に入局しました。自治医科大学付属病院、東京通信病院、日赤医療センターでの勤務を経て、現在関東中央病院で耳鼻咽喉科の 1 人医長をしています。世田谷区用賀にある病院で、公立共済組合でもあるので 12 時には時報として学校のチャイム音が病院内に鳴り響きます。2021 年 8 月現在は中軽症のコロナ病棟もあり、発熱外来も備えています。初期研修医の先生も 1 学年に 2 人ほど千葉大学卒の先生がいます。スタッフとしてもテニスクラブの中馬(頃安)久美子先生も皮膚科で勤務されており、時々千葉話で盛り上がります。

もともと耳科学に興味があり東京大学に入局したこともあり、現在週 1 で東京大学耳鼻咽喉科の外来で小児難聴外来、難聴遺伝外来、補聴器外来を担当しています。2018 年に臨床遺伝専門医の資格を持ちましたので、人工内耳などの患者さんに遺伝カウンセリングなどを行っています。鎌谷洋一郎先生がご説明されていると思いますが遺伝学については近年で研究が非常に進んだ分野ですが、倫理的には発展途上な点も多い分野です。難聴の患者さん、特に乳幼児のご紹介患者さんが多いので、ご家族含め、良い方向に導けるように、療育のアドバイス、コミュニケーション方法の確立など診療しています。子育てには正解はないのと同様、小児難聴の治療にも正解はなく、患者さんとその家族それぞれの道と一緒に探しています。最近では COVID-19 の問題で病院への受診が遅れるかたも散見され影響を感じました。

同じく 2002 年卒業の主人(坂田礼 眼科医)とも昔のことを懐かしく思い出します。東京でもるのはなの先生方と素晴らしい出会いがあり縁を大事にしたいと思います。今後ともよろしく願いいたします。

卒後 20 年のことば



聖路加国際病院循環器内科 副医長 **椎名由美**
(平成 14 年卒)

平成 14 年卒の椎名と申します。この度はこのような機会を頂きありがとうございます。大学時代の思い出としては同期や先輩方とボランティア活動に取り組んだことが懐かしいです。毎年タイの少数民族の村に長期滞在しタイ人の学生達と活動したこと、20 年以上前は院内図書館がなかったので入院患者さん向けの巡回図書貸出サービスを立ち上げたことが特に思い出深いです。

卒業後は千葉大学の第三内科に入局し関連病院研修後に大学院に戻り博士号を取得し、UK のインペリアルカレッジ・ロイヤルブromptン病院にて成人先天性心疾患ユニットのフェロー、心臓 MRI ユニットのフェローとして 3 年弱研鑽しました。必死に英語を勉強して UK の移民医師免許のようなものを取得し、外来で患者さんを診察し referral を書き、心臓外科医に手術症例のプレゼンをし、MRI のレポートを書き主治医に異常所見を電話するという、純ジャパニーズの自分には超ハードな日々でした。私が専門とする成人先天性心疾患や心疾患合併ハイリスク妊娠の循環器的管理は、欧米では研修システムも専門医制度も整っておりますが、日本では新しい分野で、ようやく今年から専門医試験を始めるところです。小児から成人医療へのスムーズな移行システムは国内モデル事業の一つであり、さらなる制度の確立が期待されています。

帰国後は聖路加国際病院でも成人先天性心疾患診療を立ち上げるということで勤務させて頂き、現在に至ります。前部長の丹羽公一郎先生、現部長の小宮山伸之先生は千葉大の先輩であり、現在 3 歳の息子を育てながらも何とかフルタイムで三次救急病院に勤務できるのは大先輩方のおかげです。世間は広いようで意外と狭いもので、今でも千葉大時代の先輩後輩と仕事でご一緒することが多く、さまざまなお縁のおかげで現在があります。今後ともどうぞよろしく願います。

卒業 20 年を迎えて



マーガレットこどもクリニック 院長 **田中 純子**
(平成 14 年卒)

今回のご依頼を受けて、自分が医師になり 20 年も経つことに大変驚きました。現在、私は NPO 法人フローレンスとともに、渋谷区代々木に開設した「おやこ基地シブヤ」にて、「マーガレットこどもクリニック」および病児保育室を運営しております。自分が開業するとは、全く想像していませんでした。人との縁で現在に至ります。

卒業後は千葉大学の小児科に入局しました。出産を機に都内での勤務を探しました。仕事探しの前に、こどもが病気のときの病児保育の確保をと考え、保育先を探し始めたのがフローレンスとの出会いでした。現在は、弊法人の理事長である駒崎弘樹氏の著書『「社会を変える」を仕事にする』を読み、創業当時はこどももいなかった若者が、社会を変えよう、病児保育問題をなくそうと闘っていることに衝撃を受けました。自分も何かできないか、この人と働いてみたいと突き動かされるように、フローレンスに応募をしました。

フローレンスはその後、病児保育問題だけではなく待機児童問題、障害児保育問題、虐待問題、貧困問題と親子をとりまく様々な問題にチャレンジをしています。私はその一角で、こどもの病気のみならず、親の不安にも寄り添うクリニックを目指してスタッフと取り組んでいます。

社会において「病児保育」の認知は高まりましたが、まだまだ解決とは言えない状況です。子育て・家事の負担が母親に偏ることもまだまだ問題です。診察室や病児保育室で父親がこどもを連れてくることはずいぶん増えてきましたが、圧倒的に母親が多い状況は変わりません。

私は幸い、仕事においてジェンダーギャップを感じることはなく、小児科感染班の当時のリーダー石和田稔彦先生や周りの先輩方のおかげで、出産、育児で辛い思いをすることもなく、本当に恵まれていたと思います。頂いたご恩を直接返すことはできていませんが、いま頑張っている親子をサポートすることで少しでも社会に返せたらと思っています。

卒後 10 年のことば



アツヴィ合同会社 医学統括本部 リウマチ疾患領域部
メディカルアドバイザー

川合 祐美
(平成 24 年卒)

この 10 年で、前半は病院勤務、後半は製薬会社勤務と仕事も生活も大きく変わりました。キャリアの変遷で、学んだことや気づいたことを列挙させていただきます。

●組織や社会の一員としての振る舞い

弊社では様々なトレーニングの機会が用意されていますが、そのような機会や実際の業務を通して、接遇マナー（対面・オンライン）、同僚とのチームビルディングの方法など、自己啓発本を読んだだけではなかなか身につかない知識を得て、人として成長できたと感じています。

●ロジカルなプレゼンテーション

コロナ禍以降は毎日テレワークで、一日中国内外の同僚や医師と Zoom 会議をしています。その中で自らがプレゼンを行い、企画の提案、依頼、情報共有、また時にはやや複雑な交渉をすることが多くあります。「自分の話を聞いて理解されないのであれば、それはその人の問題ではなく、私の伝え方が悪い」と以前上司に言われたことをいつも肝に銘じながら、わかりやすいスライド作成、わかりやすい説明が少しずつできるようになってきました。

●命の重さ

会社員でいると人の命の責任を直接負うことはありませんが、臨床医時代を思い返すとそれがどれだけ重いことなのかを痛感します。ワークライフバランスや ON/OFF をしっかりとるべき、と昨今言われていますが、命に OFF はありません。その責務を担うことの辛さ、そして素晴らしさを強く実感します。

●患者さんを診ることの喜び

弊社では副職が認められているので、外来、産業医、スポーツドクターの活動も続けています。忙しい病院勤務の中では少し忘れがちだった、直接患者さんを診ることの楽しさや喜びを今は心から感じ、私は医師という仕事が好きなのだと改めて強く認識しています。

上記以外にも今まで多くの方々に支えられながら多くのことを学びました。それはどれも、千葉大学で学びがあったから得られたものやご縁によるものだと感謝しています。今後もニッチな働き方をしていくとは思いますが、「医師」という仕事のダイバーシティが広がっていくように微力ながら活動してまいります。先生方、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

卒後 10 年目を迎えて



東京都立小児総合医療センター 感染症科 医員 舟越 葉那子
(旧姓 山内)
(平成 24 年卒)

この度は、このような機会をいただきありがとうございます。

私は千葉県の君津中央病院で初期研修を行い、その後小児科後期研修から現在の病院に勤め、小児科のサブスペシャリティとして感染症を学んでおります。千葉県出身のため、敢えて若い頃に千葉を離れて東京に出てみようとしたところ、東京勤務のまま卒後 10 年目となっております。振り返ると周囲に恵まれて多くの貴重な経験をさせていただいた濃厚な時間でした。君津中央病院で広い医療圏を守る三次病院の機能を身を持って感じ、医師としての心構えを教えていただきました。現在勤める小児病院には、統合し新開院してから 5 年目の後期研修医として入職しました。指導医も研修医自身も、意欲に満ちた中であり、研修期間にできた人脈とともに私の小児科医人生にとって重要な 3 年間となりました。小児科のサブスペシャリティとして感染症科で研鑽を積んだ次の 3 年間では、専門家になるために必要な覚悟と努力に追いついて行けず、でも現実、すなわち困っている患者さんには直面することの繰り返しに、戸惑いながらも、進むしかない毎日でありました。短期間ですが海外での臨床経験もさせていただき、今後の日本の小児感染症診療に自分をどう生かしていくか、考え悩む日々のなか、新型コロナウイルスの流行期に入りました。若輩者ですが、病院幹部の皆様とも日々対策を講じる立場に立たせていただき、また新たな経験を積んでいる最中です。

現在の病院では、後期研修医時代も、感染症科に従事することになってからも、多くの科と関わらせていただいている立場ではありますが、全国各地から研修研鑽に来られている先生方がおられる中、千葉大学卒業の先輩・後輩の先生方とはそれだけで親しくさせていただき、大変感謝しております。昨年からの未曾有の事態において、その先輩・後輩方と共に食事をする機会さえ持てず、非常に残念です。

この度は、私の 10 年間を振り返る機会をいただきありがとうございます。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

厚労省だより

医系技官として勤務を始めて



厚生労働省医政局地域医療計画課 在宅医療専門官 **井上 雅寛**
(平成 21 年卒)

皆様はじめまして、平成 21 年卒の井上雅寛と申します。本年 4 月から千葉大学大学院医学研究院整形外科学医局より人事交流で厚生労働省医政局地域医療計画課に勤務しており、この度東京るのはな会から貴重な機会を頂きまして、現在の近況を記させていただきます。

私は平成 21 年に千葉大学医学部を卒業し、千葉県立病院群初期研修プログラムで千葉県内の地域医療に携わりました。もともと整形外科志望でありましたので、平成 23 年千葉大学大学院医学研究院整形外科学に入局。県内の関連病院で研修を経た後、平成 30 年に学位を取得。同年から 2 年間、千葉県東金市にある東千葉メディカルセンターにて整形外科医として、勤務しておりました。総合病院で医療を行っている時、骨折で運ばれてくる高齢患者を手術することまでは出来てもフォローできず、また患者の行先も様々であるため、患者がその後どうなっているか分からないことが多くあります（患者行方不明事件ともいえます）。本当に手術が必要なのか、地域でどのように対応すればよいのか、考えていたところ、大鳥精司教授より、厚生労働省への人事交流のお話を頂き、行政では地域医療をどのように扱っているのか学ぶため、また私の経験が少しでも地域医療の仕組みづくりへの還元につながればとの思いから 2 年間の役所勤めが始まりました。

厚生労働省入省からの国会対応

4 月 1 日に地域医療計画課へ配属となりましたが、同日から予備知識も何もない状況での国会対応が始まりました。国会開催期間中に入省するため致し方ない部分はありますが、今年の通常国会において医政局では法案（良質かつ適切な医

療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部を改正する法律)を提出しており、成立に向け厚生労働委員会での審議や国会の質疑応答への対応が慌ただしく行われておりました。

基本的に国会対応は議員の主意書が届くところから始まります。議員が何を聞きたいかを確認し、課の業務と関係があれば、その質問への回答を作成し国会で質疑対応する大臣や局長へ内容を説明。流れとしては簡単ですが、質問が多いことと、期限が非常に短いため、朝まで作業となることもあります。ただ、メールでの対応が増えたこと、新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、議員・秘書との面談に Web 会議が増えたことから、それでも業務は改善しているそうです。

国会対応でまず直面したことは、言葉遣いの難しさです。国会答弁に限らず、国の発言は非常に重く受け止められますので、1文字として疎かにできません。ここが個人として自分の感覚で発言できていた昨年度までと大きく異なり、公での業務の難しさとともに強い責任を感じる場所です。また、私の働く地域医療計画課はもともと行政で働いている医系技官、事務官や私のような人事交流はもちろん、県、市町村だけでなく関係団体からも研修で来られている方がおりますが、皆人格、要点の把握力(1つ聞いたら10返ってきます)、業務の能率ともに素晴らしく、一緒に仕事をしていて圧倒されるとともに、話しているだけでも非常に勉強になっております。

議員対応等は官僚としてのマナーや業務内容について研修を受けてから、と思っておりましたが、思っていた以上に官僚は体育会系で、最初の1か月は日々降りかかる様々な業務を、上司・同僚に相談しながらこなしていただくだけで、いつの間にか終わっておりました。

8 次医療計画策定に向けた業務

外来医療計画の担当者として

この2年間で私に与えられた地域医療のテーマは外来医療、在宅医療といった主に入院外の医療提供体制の整備をどうするか、についてです。

現在外来医療については主に、外来医療計画、外来機能報告、かかりつけ医の検討が行われています。地域における外来医療提供体制の問題としては、地域で中心的に外来医療を担う無床診療所の開設状況が都市部に偏っている、診療所における診療科の専門分化が進んでいる、救急医療提供体制の構築、グループ診療の実施等の医療機関の連携の取組が地域で個々の医療機関の自主的な取組に委ねられている等の状況にあります。そのため、都市部では医療供給過多となってい

るところがある一方で、地域によっては全く行き届いていないところもあり、その対策として、2020年度に都道府県が外来医療計画を作成し、新たに開業使用とする医師が自主的に経営判断を出来るよう、外来医師偏在を「見える化」して提供しました。現在各都道府県が作成したこの計画の確認作業を行っておりますが、新型コロナウイルス感染拡大の状況下において新規開業自体が少なく、偏在対策は今後も課題となっております。

外来機能報告は、大病院と診療所での外来の役割を明確化する目的で検討されています。受診の原則としてフリーアクセスがあり、専門性の高い大学病院等に患者が集まりやすく待ち時間が非常に長くなること、病状が落ち着いた患者さんもそのまま受診し続ける傾向があることは、私も感覚として持っておりましたが、厚労省でも問題として扱われております。そのため大病院では主に専門性の高い外来を、かかりつけ機能をもつ診療所では主に一般外来（もちろん例外はあります）と外来の機能を明確化し、より効率的な受診に繋げられるよう今まさにワーキンググループで検討されているところです。まだ検討段階ですので、どのような形になるのかは分かりませんが、私が臨床に戻った後に、少しでもその効果が感じられるよう、政策を考えていきたいと思っております。

地域における在宅医療の充実について

高齢化の進展および今後の人口減少に対応するため中長期的な病床削減によって、今後在宅医療を必要とする患者が増大すると言われております。実は私は在宅医療専門官という名を拝命しておりますが、お恥ずかしながらこの3月まで在宅医療についてはまるで気にも留めておりませんでした。しかし実際に担当になってみますと、地域によって在宅医療提供体制は大きく異なり、その地域の歴史や社会性にも深く関わるため、在宅医療を充実させるためには単純に医療、介護、福祉サービスを増やせば良いのではない、非常に難しい課題だということが分かりました。在宅医療を担う医療者の想いは変わらないと思っておりますが、東京と過疎地の在宅医療提供体制は大きく異なります。在宅医療の目標の一つは、ヒトが望む場所で望む医療を受け、最後を迎えられることである、という考えがあるようです。地域包括ケアの概念が叫ばれておりますが、在宅医療の体制整備は町作りに繋がります。どうまとまるか、まとめられるか、課題だらけな現状ですが、非常に壮大なテーマを与えて頂いたと日々取り組んでおります。

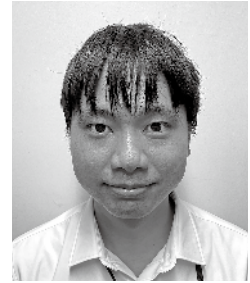
この在宅医療ですが、現在新型コロナウイルス感染症における自宅療養患者への在宅医や訪問看護師等の対応が増え、俄然注目が集まっております。幸い私自

身はまだコロナ本部での業務に駆り出されてはおりませんが、自宅療養者に対する民間団体の治療プロトコル作成会議にオブザーバーとして参加するなどを通常の業務に加え行っております。コロナ本部の方々は頭が下がるほど昼夜なく働いており、一人、また一人と隣近所の席の方が本部に駆り出される現状に、戦々恐々としつつ早く収束して欲しいと願うばかりです。

ハンマーを振りかざして手術を行っていた日々から一転してデスクワークとなり早4ヶ月が経ちました。まだまだ慣れないところは多いですが、この2年間で千葉大学ひいては日本の未来に少しでも貢献できればと思っております。今後とも宜しく願いいたします。

厚生労働省だより

厚生労働省における 医系技官と人事交流



厚生労働省 医政局 地域医療計画課
医師確保等地域医療対策室 室長補佐

勝山陽太
(平成22年卒)

1. 医系技官の人事交流

平成22年(2010年)卒業の勝山陽太と申します。2021年4月より、人事交流として、厚生労働省に来ております。配属先は、医政局地域医療計画課であり、医師偏在対策などを担当しております。それまでは、千葉県の地方独立行政方さんむ医療センターの総合診療科で勤務しておりました。

医系技官の人事交流の多くは、大学の各科から派遣されており、ある大学の科では常に1人出しているところもあるようです。一般的には2年間で、希望してそれ以上延期している方もいます。私の場合は、以前人事交流をされた吉村健佑先生にお話を伺い、厚生労働省で上司となる人と面談しました。その後その上司が千葉大学総合診療科の生坂教授に挨拶に来て、さらに生坂教授とともに厚生労働省に行き採用の担当者と面談、という流れで人事交流が決まりました。千葉大学総合診療科では初めての医系技官であり、自ら希望して行くこととなりました。

4年前に千葉県の医師が少ない地域の病院で勤務しはじめた当初は、院長を含めた周囲の理解があったことなどの幸運が重なり、科を立ち上げ、臨床研修医の受け入れを増やし、学生実習を受け入れ始め、スタッフや専攻医を採用し、地域に少しは貢献できているように感じていました。しかし、看護師やコメディカルの不足、地域の医療・介護のリソースの不足、地域の人口減少、病院の経営など個人にできることの限界も感じさせられました。そこで優秀な後輩達がしっかり業務を引き継いでくれて、自分の業務が少なくなった時に、違う方法で医療へアプローチしてみたい、と飛び込んだのが厚生労働省でした。話を決めたものの、

新型コロナウイルスの蔓延が止まらず、出向直前にはコロナ病棟を担当しており、後ろ髪を引かれる思いでしたが、同僚も快く送り出してくれました。

2. 厚生労働省の中の医系技官

厚生労働省には病院と同じように様々な職種の方がいます。事務官が多いですが、技官としては医師の他に、看護師、薬剤師、栄養士などがそれぞれ専門を生かして働いています。医系技官は数多くの部署で働いていますが、中でも私が配属された医政局には多くの方が働いており、上司や同僚など自分の席の周りにたくさんいます。

人事交流ではなく、厚生労働省で元から働いている方をプロパーと呼びますが、臨床研修の2年間を終えてすぐに入省する方が多いようです。もちろん各種専門医取得後に入る方や、臨床を10年以上やってから人事交流で来て、そのままプロパーになる方もいます。

プロパーでも人事交流でも医系技官として、事務官とともに積極的に医療政策の企画・立案を求められることは変わりありません。いわゆる事務処理能力や国会対応などは人事交流で来たばかりの身にとって（ずっといたとしても？）、事務官の足元にも及びませんが、事務官もこちらを医療現場を知っている医系技官として扱ってくれるため、入省直後から非常に働きやすい環境でした。

3. 医系技官の仕事内容

人事交流の医系技官は、それまでの専門性を生かした仕事内容になることもあり、必ずではないですが、救急科の医師が救急の対策を、産婦人科の医師が周産期の対策を担当していました。私の場合は、医師不足の地域で勤務していたことから、医師不足地域に医師を確保する対策の担当となりました。

事務官と同様に、国会議員に現在の政策を説明し、国会での議員の質疑応答のサポートをすることもあります。担当している範囲については、誰よりも詳しくなることが必要であり、国会議員、都道府県職員、一般の方も含め皆に説明できることが求められます。もちろん上司や同僚のサポートがあるため、入省直後に一人で誰かに説明しなければいけないわけではありません。

前述の通り、事務官と比較して医系技官には医療現場の知識や感覚が求められ、必然的に課題の解決につながる案を考えることが重要な仕事になります。私もここで貢献できなければ来た意味が無い、と思って必死に頭を絞っております。ですが、そう簡単では無いので、医師としての先輩方に御意見を伺ったり、

研究者の方と協力して検討を進めています。どのようにすれば案が実効性のある政策になるかは、プロパーの医系技官や事務官が熟知しているので、現場感覚での案を出して叩いてもらうことで、案が進むこともあります。

4. 自分が担当した仕事内容

日本の大きな流れとして、人口減少社会、高齢者人口の増加、生産年齢人口の減少があります。そんな中で医療提供体制を確保し続けるために、日本全体でどのようにしていくか、ということの検討が求められ、現在厚生労働省では2040年の医療提供体制を見据えた対応として、地域医療構想の実現、医師・医療従事者の働き方改革、医師偏在対策の推進、といった三位一体の改革に取り組んでいます。

医師偏在の問題は、世界中の国々であり、先進国、発展途上国問わず、地方に医師を確保することは様々な対策をしても難しい問題です。東京都でも島嶼圏域では医師少数区域とされていますし、地域枠学生のコースとして、小児、周産期、救急、へき地医療のコースが用意されています。

どのようにすれば地域枠の学生がキャリアを積み重ねていけるのか、どうすれば地域に医師が定着するのか、など一朝一夕では解決できない難問、そして重要な問題を日々考え、それに関わる方々と相談したり、今後はより良い方法を指針やガイドラインの発出なども含め、少しずつ進めて行く予定です。

5. おわりに

医系技官の仕事は臨床と異なりすぐには結果が出ないかもしれません。患者さんから直接感謝されることも無いかもしれません。さらには自分が担当している範囲だけで、医療提供体制の問題が全て解決するわけでもありません。しかし仕事を通じてその一部を一緒に考えている、と感じられ、非常にやりがいがあります。また現場を見てきたからこそ、このアプローチがうまくいくとあの問題が解決する、と想像できることもやりがいにつながっています。

来たばかりの自分が偉そうなことは言えませんが、臨床を経験したからこそできることがあると思います。若手の皆様でご興味がありましたら、厚生労働省との人事交流はいかがでしょうか。ベテランの皆様は私と同様に千葉大学から人事交流で来ている方やプロパーの方がたくさんおりますので、引き続き御指導、御鞭撻の程、よろしくお願い致します。

昭和大学のコロナ対策と るのはな同窓生の動静



昭和大学医学部乳腺外科教授
昭和大学病院プレストセンター長

中村 清吾
(昭和 57 年卒)

昭和 57 卒で、現在、昭和大学の中村です。当大学では、現医学部長の公衆衛生教授小風暁先生（平成 2 年卒）、産科麻酔教授の加藤里絵先生（平成 4 年卒）、昭和大学病院脊椎外科センター長・教授の豊根知明先生（昭和 60 年卒）等 千葉大学医学部 OB が在籍しています。私は、医学部外科学講座乳腺外科学部門の教授で、昭和大学病院のプレストセンター長、がんゲノム医療センター長を兼務しております。私のところには、千葉大卒業後 4 年目の専攻医として、重光（旧姓百石）莉紗先生も在籍しており、コロナ禍が無ければ、昭和大学るのはな同窓会でも開きたい状況にあります。

私自身は、大学卒業後、医局には所属せずに、聖路加国際病院の外科レジデント（6 年間）から、計 28 年間所属した後、約 10 年前に、現職に異動しました。大学を離れた生活は長いのですが、時折、東邦大の嶋田英昭先生（消化器外科教授）や、この度のはな同窓会本部会長にご就任される吉原俊雄先生に、東京で主催する様々な会にお声がけいただくと、なぜかホッと致します。

コロナに関しては、昨年より、相良博典病院長（呼吸器内科がご専門のため、マネジメントがスムーズでした）がトップの、新型コロナウイルス対策本部と発熱者対応外来（病院駐車場に仮設）が設置され、大学一丸となった対応を行っております。マスコミによく登場される二木芳人教授は、定年を過ぎておられるので、現場からは離れておりますが、その跡を継ぐ時松一成教授が獅子奮迅の働きをされております。昨年 6 月に学内 PCR センターが設置され、品川区保健所に衛生検査所としての認可を受け、発熱外来からの患者、全ての入院患者はもとより、病院職員、医歯薬学部の学生等の検査に迅速に対応する体制が整備されています。これまでに、延べ約 6 万件の PCR 検査が行われ、昭和大学の新型コロナウイルス対策のベースを支えています。

昭和大学のユニークな点は、学部（医歯薬と看護を主とする保健医療学部）を

問わず、1年目は、東京を離れた富士吉田キャンパスで、寮生活を送ります。その際に、将来のチーム医療の根幹が養われ、5年目の希望者には、学部間連携の病棟実習も用意されています。聖路加を離れた動機の一つに、もっと深く医学教育に携わりたいという思いがあったので、そのシステムに感銘し、とても満足した大学生活を送っております。

また、現在、リトアニアの国立癌センターと遺伝性乳癌に関する共同研究を始める予定で、これからも臨床、研究、教育の3要素のバランスを保ちつつ、大学人生活を続けたいと考えております。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

史実から読みとるパンデミック



東京医科大学 免疫学分野 **横須賀 忠**
(平成5年卒)

毎年、免疫学の最初の講義で学生に説明する重要な2つの史実があります。

古代アテナイの歴史家トゥキディデス（紀元前460～395年）がペロポネソス戦争（BC431～BC404年）を記した『戦史』にその1つが記述されています。最近もアメリカの政治学者が米 vs 中の二大覇権国家の緊張状態を「トゥキディデスの罫」と表現しましたが、古代ギリシア時代も、ペロポネソス同盟を率いるスパルタと、デロス同盟を率い急速に台頭するアテナイの二大都市国家（ポリス）が構造的緊張関係にありました。ポリスとは、城砦に囲まれた神殿（アクロポリス）と城壁に囲まれた下町、さらに城壁の外に広がる田園（農耕地）から成ります。BC430年の十年戦争で、スパルタ軍がアテナイに攻め入った際、田園の住民も含め多くの市民がアテナイの城壁内へと避難しました。しかし、スパルタ軍の激しい攻撃は凌いだものの、城壁内で流行した疫病で市民の6分の1が病死したそうです。「密になると疫病が流行る」はこの時から認知されていたわけです。一方、殺し合いを繰り返していた敵都市国家同士も、4年に1度は平和的にスポーツの祭典を開催していたことはご存知の通りです。

この疫病は、自らも罹患したトゥキディデスの詳細な記述「突然の頭痛と高熱、眼の充血、咽喉出血と咽頭痛、臭気を帯びた呼気、胸痛と激しい咳、嘔気と胆汁嘔吐、顔面蒼白、赤みを帯びた鉛色の皮膚と膿疱、不眠不穏」から、また「エチオピアからエジプトを経由してアテナイに伝わった」という戦史の内容から、エボラ出血熱であるという仮説があります。未開の地での未知の病原体との接触、ナイル川を下った人の移動、軍隊の侵攻を介したギリシア都市国家への拡散が起こっていたわけです。

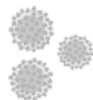
もう1つの史実は、シケリア（ギリシア・カルタゴ）戦争（BC580～BC265年）です。ギリシアで都市国家が繁栄していた同時期に、イタリアでは都市国家ローマが周囲の都市国家を制圧し共和制ローマへと発展していました。一方、ジブラルタル海峡を挟んだモロッコとスペインでは、フェニキア人が建国した通商国家カルタゴが勢力を強めており、ギリシア都市国家とカルタゴとの領土争いがその境界線であるシチリア島で起こっていました。ハンニバル將軍率いるカルタゴ軍は、豊富な軍事資金を基に若い屈強な兵士を集め、シチリア島に何度も攻め

込みます。シチリア島の都市国家シュラクサや他のギリシアの都市国家は、前回の生き残りの老兵を集めて戦地に送り込むしかありませんでした。しかし、カルタゴ軍は苦戦を強いられます。シチリア島には風土病が蔓延しており、戦いよりも病死するカルタゴ軍の若い兵士が続出し、ハンニバル将軍自身も疫病で命を落とします。一方、一度風土病を経験した都市国家の老兵は疫病をものともしないわけです。このことは、「免疫には記憶がある」最初の記述であると考えられています。

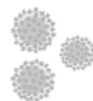
この「免疫記憶」の概念は、18世紀にエドワード・ジェンナー（1749～1823年）による人類最初のワクチン人体実験として受け継がれます。当時、天然痘患者の膿疱抽出液を薄めて接種した人痘法は既に考案されていましたが、接種者の2%に重症化例が出ていました。雌牛（Vacca）の伝染病である牛痘にかかった乳搾りは種痘にかからないという疫学データから、乳搾りの手に出来た水疱内容物をジェンナーの使用人の息子に接種したのが1796年であり、Vaccineの始まりとなりました。その後、ルイ・パスツール（1822～1895年）がコレラと狂犬病の弱毒株を使ったVaccineを開発し、フォン・ベーリング（1854～1917年）はジフテリアから回復した患者さんの血清をジフテリア患者に注射し、血清中の「抗毒素」今でいう抗体の発見で1901年第1回ノーベル医学生理学賞を受賞します。そんな史実を理解しておりますと、現在私達が遭遇しているパンデミックは、数千年の間に繰り返されてきた人類と病原体との攻防の1シーンであり、歴史から学び取れる未来に生きる知恵はまだ残されているのではないのでしょうか。



筑波大学附属高校の担任でもあった恩師栗田伸子先生は、東京大学文学部史学科ご出身の古代ローマ史の研究者でした。板書いっばいに速記された古代ローマに関する仮説を書き写す世界史の授業は、週5時間通年にもかかわらず、ほぼ古代ローマ史で終わりました。昨年、東京学芸大学をご退官され、コロナ禍でも働く医師への感謝のお手紙を戴きました。トゥキディデスの話を学生にしています、と講義スライド1枚とあらすじを返信にしたところ、もう一度「戦史」を読み直しましたが、まだ病原体の種類は諸説紛々としているため、スライドに訂正を加えて下さい、というコメントと一緒に、この本が送られてきました。今も研究者として先を走っているようです。



コロナについて 近況報告



赤倉 功一郎
(昭和 59 年卒)

新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身茂会長は私ども JCHO の理事長です。病院としても COVID-19 診療を担うことは使命であると考えています。現在、別館の専用病棟 2 病棟 (HCU を含む) と ICU の 4 床をコロナ病床として診療にあたっています。

独立行政法人地域医療機能推進機構 (JCHO)
東京新宿メディカルセンター 副院長・泌尿器科部長



順天堂大学は、COVID-19 専用病床は中等症 26 床、重症 14 床がほぼ満床であり、病棟のを内科医が、外来を外科医が、チームを結成して診療しています。最近では文京区の高齢者の PCR を日々 300 人以上担当しています。



順天堂大学医学部乳腺腫瘍学講座 主任教授 **齊藤 光江**
(旧姓 海老原)
(昭和 59 年卒)



ダイヤモンドプリンセス号でのコロナ感染症患者を受け入れて以来、3 次救急病院としての社会的使命を果たすべく、継続的に患者さんを受け入れております。幸い、日本感染症学会理事長でもある感染症学講座の館田一博教授が先頭に立って院内感染症対策を徹底していますので、クラスター発生もなく、粛々と治療にあたっています。最近では、比較的若年者の重症症例が増えている傾向にあります。特に、小児の重症例の診療可能な病院が少ないので、南東京地区 250 万人の都民の皆様の最後の砦として、「断らない」医療をモットーにしております。



島田 英昭
(昭和 59 年卒)

東邦大学大学院消化器外科学講座・臨床腫瘍学講座



安西 尚彦
(平成2年卒)

千葉大学大学院医学研究院薬理学
同副研究院長(広報担当)
附属図書館亥鼻分館長

令和3年4月から、新医学部棟の利用が始まり、順番に引越しが行われています。全ての教室の引越しが終わるまでに半年近くかかりそうです。講義はメインとサブの2教室を用いて原則対面で実施しております。



2021年もコロナも、コロナ一色でした。

コロナ病床の運営、コロナワクチンの接種、コロナ在宅の開始、次から次にミッションをこなす日々でした。

小規模のクラスターが今年も発生しました。本当に大変でした。

ただ、コロナと戦って、私たちの組織も本当に強くなれたと思います。

災い転じて福となす。

コロナが組織に良い油をさしてくれたというように考えながら仕事をする日々です。



東京ろのはな会会長
千葉大学客員教授

岡本 和久
(平成2年卒)



井上 賢治
(平成5年卒)

医療法人社団済安堂 井上眼科病院 理事長

医療業界も含め社会全体が新型コロナウイルスの影響を大きく受け、当院も患者さまの受診控えが続き苦慮しております。ただ、コロナ禍で学会やセミナーなどの会合がWebになり、自分の時間を作れるようになりました。家族との時間も増え、自宅で一緒に食事をとることで、絆がより深まりました。



2021年8月現在、当科では分娩時全例抗原検査、陰性でも分娩中マスク着用、夫のみ立ち会い許可、その他は面会禁止です。妊婦は陽性例は原則入院管理、肺炎増悪時・陣痛発来時は帝王切開としています。

甲 賀 かをり 東京大学大学院医学系研究科産婦人科学講座 准教授
(平成8年卒)



医院の運営と感染予防の両立に悩みながら、何とか生き延びています。家庭では、子供たちが幼いため休園やオンライン授業をやりくりし、いつかはこの苦境も収束するはずだ、との希望は捨てず、4月に第3子次男が生まれました。



医療法人社団惟心会 **吉 田 健 一**
(平成11年卒)



私が勤務する聖路加国際病院は、初期のクルーズ船の患者受け入れから一貫して、日々積極的にCOVID患者の対応をしており、特に献身的なコメディカルの皆様に日々感謝です

椎 名 由 美 聖路加国際病院循環器内科 副医長
(平成14年卒)

2021年8月11日現在、東京オリンピック2020が閉会しましたが、東京では新型コロナウイルスが猛威をふるっております。従来の新型コロナウイルスよりも感染力が強いデルタ株が蔓延したこともあり、感染者が連日増加しております。ワクチン接種が進んでおりますが、この原稿が掲載される時には日本・世界の感染状況が少しでも改善していることを願ってやみません。



柳 沢 如 樹
(平成15年卒)

柳沢クリニック院長
国立国際医療研究センター客員研究員



0次予防（エアロゾル換気可視化モデル：松戸市アドバイザリー）、1次予防（人流分析：墨田保健所）、2次予防（ドライブスルー診療）とbeyond COVIDの医療デザインに取り組んでいます。



武 藤 剛
(平成19年卒)

北里大学医学部衛生学単位 講師
千葉大学（予防医学センター助教（非常勤）・墨田 Design Research Institute（研究員））
順天堂大学（非常勤講師）



千 先 園 子
(平成21年卒)

国立成育医療研究センター こころの診療部 医師

厚労省母子保健課では、母子保健施策のCOVIDへの対応や研究事業に関わりました。コロナ禍の生活で、子ども達や保護者の方等に、様々な心身の影響が出ていることも聞いており、胸を痛めております。

編集後記

担当理事の井上賢治先生、いつもありがとうございます。また、ご執筆くださった先生方に心より感謝申し上げます。勤務医部会長を拝命しておりますが、種々の懇親会企画が休会となってしまったこともあり、このInohana Tokyoはものはなの絆を保つ貴重なメディアであると思います。毎年掲載している「病院紹介」では、新しいスタッフなどの情報に改訂してあります。クリニック勤務の先生方も病院勤務の先生方も、同窓の専門医が都内の中核病院のほとんどに在職しておりますので、是非ご紹介ください。Inohana Tokyoを利用して同窓生の楽しく充実したお仕事の支援につながれば幸いです。皆様のご健康とご活躍を心よりご祈念申し上げます。

東邦大学大学院消化器外科学講座教授

東邦大学大学院臨床腫瘍学講座教授（併任）

島田 英昭（昭和59年卒）

今回のInohana Tokyoは、東京ものはな会が新体制となったこともあり盛り沢山の内容となっています。広報担当の井上賢治副会長のご努力の賜物です。会誌が充実することは大変喜ばしいことですが、広報担当という肩書がありながら井上先生にすべてお任せしてしまっている小生に取りましては、複雑な気持ちもございます。この場をお借りしましてお詫びとお礼をさせていただきたいと思います。2021年はオリンピックもありましたが、コロナ禍で医療従事者にとっては有り難くない面で記憶に残る1年だったと思います。2022年がどのような年になるか全く予想できませんが、東京ものはな会会員の皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

帝京大学医学部附属溝口病院病院教授

三浦 文彦（平成3年卒）

2020年から続いているコロナ禍は2021年8月現在、東京だけにとどまらず、全国に大きな影響を及ぼしております。新型コロナウイルス感染患者は急増し、医療体制が逼迫している中でも、同窓会員の皆様におかれましては、それぞれの現場で奮闘していると存じます。患者様の健康はもちろん、私たち医療者自身も心身の健康を保ち、このInohana Tokyo 25号が発刊される頃には少しでも状況が落ち着いていることを祈念しております。このような状況だからこそ、東京ものはな会の皆様とのつながりを大切に、この有事を乗り越えていきたいと存じます。

柳沢クリニック院長／国立国際医療研究センター客員研究員

柳澤 如樹（平成15年卒）

2016年よりInohana Tokyoの広報を担当させていただき、早いもので今号で7度目の編集作業をさせていただきました。新型コロナウイルスは昨年引き続き猛威を振るっており、今号より新たに「コロナについて近況報告」のコーナーを立ち上げました。自粛生活を要される中、先生方がどのように過ごされているのか、また先生方の施設ではどのような対応をされているかを短文で綴っていただきました。新型コロナウイルスが一日でも早く収束し、次号にはこのコーナーが不要になることを願っております。最後に、お忙しい中ご寄稿を賜りました先生方には心より御礼申し上げます。

医療法人社団済安堂井上眼科病院理事長

井上 賢治（平成5年卒）

収支報告書

令和2年度2020年4月1日～2021年3月31日

科目	収入				科目	支出		
	令和2年度予算	令和2年度決算	令和1年度	令和3年度予算		令和2年度予算	令和2年度決算	令和3年度予算
年会費	1600000	1935000	1360000	1600000	人件費	0	0	0
人数	320	387	272	320	事務費	0	0	0
利息	400000	110	98	400000	一般	0	0	0
企業広告	1200000	260000	200000	400000	印刷	0	0	0
参加費	3200000	0	1080000	1200000	諸経費	0	0	0
あのはな同窓会		300000	300000	3200000	会議費	1400000	0	1400000
補助金		2495497	2940098		総会	500000	0	500000
当期収入		1097570	3092542		講演料	100000	0	100000
当期支出		1397927	△152444		新年会	600000	0	600000
当期収支		0	152444		講演料	100000	0	100000
補償		0	0		諸経費	100000	0	100000
最終支出		0	0		理事会	0	0	0
財産		4975877	2021/5/18		事業費	1800000	1800000	1800000
		1696201	2020/4/1		あき東京会誌	1700000	1096800	1700000
		7850216	2021/2/22		名簿	0	0	0
		1084543	2021/7/10		通信費	0	0	0
合計		15606837			諸経費	100000	770	100000
					慶事	0	0	0
					渉外	0	1097570	0
					当期支出			
					予備費			
					次期繰越	3200000	1097570	3200000
					支出合計			
					会計担当			石井謙宏
					監事			栗原正利

収支報告書について監査の結果適正と認めます。

2021年 9月27日
 岩倉 弘毅 印
 2021年 9月20日
 伊藤 達也 印

東京ゐのはな会会則

(名称と組織)

第1条 本会は東京ゐのはな会（千葉大学医学部ゐのはな同窓会東京支部）と称し、その会員は東京都内に在住又は勤務するゐのはな同窓会会員より成る。

(事務所)

第2条 本会の事務所を東京都江戸川区篠崎町 2-7-1 医療法人社団 桐和会内に置く。

(目的)

第3条 本会は会員の親睦を深め、緊密な連携を通じて相互の利益を図り、医療の向上を目指す。

(構成)

第4条 本会の組織は地域支部および勤務医支部から成る。

1 地域支部の組織は下記のとおりとする。

中央地区	千代田区、中央区、台東区、文京区、港区	南部地区A	世田谷区、目黒区
東部地区A	墨田区、江東区、荒川区	南部地区B	品川区、大田区
東部地区B	足立区、葛飾区、江戸川区	北部地区	豊島区、北区、板橋区、練馬区
西部地区	新宿区、中野区、渋谷区、杉並区	三多摩地区	

2 勤務医支部

大学病院支部 公立病院支部 法人・私立病院支部 その他

(役員)

第5条 本会に次の役員を置く。
会長1名、副会長3名、理事若干名、監事2名

(役員の仕事及び権限)

- 第6条 (1) 会長は、本会を代表し、会務を総理する。
(2) 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは、あらかじめ定めた順位により会長の職務を代行する。
(3) 理事は、会長及び副会長を補佐して会務を掌理する。
(4) 監事は、本会の会務及び会計を監査する。

(役員を選出)

- 第7条 (1) 会長、副会長及び監事は理事会で選出し、総会の承認を得なければならない。
(2) 理事はそれぞれの支部において推薦され、総会の承認を得なければならない。
(3) 会長は特別職の理事を推薦することができる。ただし、総会の承認を得なければならない。

(役員の仕事)

- 第8条 (1) 役員の仕事は2年とする。ただし再任を妨げない。
(2) 補欠の役員の仕事は前任者の残任期間とする。

第9条 会議を分けて次の3種とする。
定時総会、臨時総会、理事会

(議 長)

第10条 会議の議長は会長がつとめる。

(定時総会)

第11条 定時総会は毎年1回これを開き、会務及び会計の報告をし、議事を議決する。

(臨時総会)

第12条 臨時総会は理事会で必要と認めたとときに開くことができる。

(理事会)

第13条 理事会は会長の召集により適時開催する。

(名誉会長及び顧問)

第14条 名誉会長及び顧問は会長の推薦を受けて総会の承認を得なければならない。

(会費等の負担金)

第15条 (1) 会費及び負担金は理事会にて決定し、総会の承認を得なければならない。
(2) 満77歳以上の会員については、会費を免除することができる。

(本会の経費)

第16条 本会の経費は会費、寄附金及びその他の収入をもってあてる。

(会計年度)

第17条 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(施行規則)

第18条 本会則には理事会に於いて、細則及び内規を設けることができる。

(会則の変更)

第19条 本会則は総会で出席者の3分の2以上の同意を得なければ変更することはできない。

〔付 則〕

本会則は昭和43年6月22日より施行する。

昭和43年6月22日制定
平成7年7月8日改正
平成13年6月16日改正
平成15年6月21日改正
平成19年6月9日改正
平成28年6月18日改正
平成30年6月9日改正

役員会の諸会務について明文化した

平成 28 年 6 月 18 日の総会にて承認、1 年間試行・検討した後、細則として会則に加える。

会務担当 役員の役割を以下の如く分担する。

- ・総務部：①年間行事予定の作成：総会、定例理事会、新年会、などの企画、連絡、執行。
 ②人事など：役員の選定、名誉会員、ゐのはな賞／社会貢献賞の推薦。
 ③会則の整備（内容検討、規定の変更、追加など）。
 ④イベントの企画、運営…若手の参加を考えた講演会、研修会、workshop など。
 ⑤議事録の作成、管理。ほか会費納入率の向上、本部との連携 など。
- ・会計部：①予算、決算の案作成、説明、執行、財産管理、寄付勧誘（個人／企業）。
 ②会費納入率の向上（現在：①口座自動引き落とし②振込、③現金）。
 ③銀行口座自動引き落とし方式の普及。
- ・広報／情報企画部：これまでの広報と惜報企画担当とを合体させる。
 ①Inohana Tokyo の企画、原稿収集、編集、発行、印刷。
 ②メール、IT 管理、会員間の連絡網構築…特に患者紹介システム、本部との連携。
 ③紹介：病院、医院、院長、部長、特に新規入会医師など。
 ④会員の動向情報（勤務地の移動、人事異動、葬祭など）、研修医と学生の把握。
 ⑤会員の要望把握、研修医、学生への働きかけ…情報提供。
 ⑥名簿管理（悪用防止策）、異動の多い研修医の情報について勤務医部会と協力。
- ・勤務医部：若手と共に歩むため、この部門が最重要との位置づけ。
 ①メール登録と活用…広報／情報企画部と協力、漏洩予防。
 ②病院、保健所、研究所、担当部署などの紹介（内容、人事、セールスポイント）。
 ③勤務医の交流（イベント、ハンドオンセミナーなど）、新規就業医師の紹介。
 ④学会、研究会、講演会、勉強会などの情報。
 ⑤研修医の動向、支援、交流、研修会、東京ゐのはな会への入会勧誘。
 ⑥他地区のゐのはな会、および都内他大学同窓会との交流。
- ・渉外部：千葉大学ゐのはな同窓会、他大学同窓会や医師会などの情報交換や交渉を担当。
- ・病診連携部：〔病院情報と開業情報、紹介状の作成〕
- ・地区：地区内、他地区との交流、開業と開業医への支援、研修会、本来は活性化のために重要、特に地区内の紹介。

Inohana Tokyo 誌 投稿規程

1. 本誌への投稿は、原則として本会の会員で、年会費納入者に限る。
2. 原稿は本会の発展に寄与するもの、会員相互の理解親睦を深めるものが望ましい。
3. 本誌は原則として、投稿原稿及びその他によって構成される。
投稿原稿の種類と、その内容および刷上り制限頁数は以下の通りとする。
(文中写真、図表、その他もページに含みます。)
 - ①学術関係(学術論文、講演会要旨など)…………… 5頁
 - ②医療関係(保険診療、症例、新任教授、病院診療所に関するものなど)…………… 5頁
 - ③随想関係(エッセイ、紀行文、趣味+個人情報など)…………… 4頁
 - ④文芸関係(書画、写真、詩歌・俳句・川柳など)…………… 2頁
 - ⑤その他(会員消息、新人会員、追悼文など)…………… 1頁
4. 投稿原稿の執筆要領送付
 - ①電子メール、CD、USB、ファクシミリ、郵送、その他
5. 著者校正は初校のみとする。

= Inohana Tokyo 25号 =

ISSN 1343-103 X

編集発行	東京るのはな会 2022. 1. 1
事務局	〒133-0061 東京都江戸川区篠崎町 2-7-1 医療法人社団 桐和会内 TEL.03-5666-1334 FAX.03-3676-6951
代表者	東京るのはな会会長 岡本 和久 (H2)
編集事務局	〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台 4-3 井上眼科病院内
広報部長	井上 賢治 (H5) TEL.03-3295-0911 FAX.03-3295-0917
編集委員長	井上 賢治 (H5)
製作	(株)外為印刷

